

こ叫んだ。カナンボールは、

「オイ金助、ちこ確りせぬかい。たかが知れた魔谷ヶ岳の山賊上りのバラモン信者の身を以て、天上天下唯我獨尊もあつたものかい。三十餘萬年未來の印度に生れた釋尊が運上取りに来るぞ。ハア困つた氣違ひが出来たものだ。オイ銀公、清泉の水でも掬うて来て顔に打掛けてやれ。まだ目が覺めぬこ見えるワイ」

銀公「あんな黒い水を掬つて来ようものなら、手も口も、眞黒けになるぢやないか」

カナン「まだ夢の連續を辿つて居るのか。よく目を開けて見よ。水晶のやうな水が、たゞようてみる」

銀公「それでも貴様、一度眞黒けの黒ン坊に染まつて了つたぢやないか」

カナン「それが夢だよ、俺達の顔を見よ。どつこも黒いところはなないぢやないか。貴様は目を塞

いでゐるから、其邊中が聞く見えるのだ。確りせぬかい」

こ平手でピシヤツミ横面を撲つた途端に、銀公は初めてバツミ目を開き、

「ア、矢張夢だつたかなア」

金助「此世は夢の浮世だ、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、如是我聞、熱々惟るに宇宙に獨一の眞神あり、之を稱して國祖國常立尊と曰ふ。汝一切の衆生、わが金言玉辭を聽聞せよ。南無無盡意菩薩の境地に立ち、三界の理法を説示する妙音菩薩が善言美詞のめく疑ふ勿れ。風は自然の音楽を奏し、宇宙萬有惟神にして舞踏す。天地間一物として眞ならざるはなし。惟神靈幸倍坐世、歸命頂禮。天上三体の神人の前に赤心を捧げ、心身を清淨潔白にして幽立微妙の眞理を聽聞せよ。吾は三界に通ずる宇宙の關門普賢聖至の再來、今は最勝妙如來、三十三相顯現して觀自在天となり、阿彌陀如來の分身閻魔大土地

藏尊、神息總統彌勒最勝妙如來、顯現す。微妙の教旨古今を絶し、東西を貫く。穴かしこく、ウンく」

云つた限り身体を二三尺空中に巻揚げ、得も言はれぬ美はしき雲に包まれ、山上目覚めて上り行く。其の審しさにスマート、カナン其他四人は後見届けむ尻ひつからげ、荆棘茂る谷道に脚を引掻きながら、山の頂指して登り行く。六人は鷹鳥山の頂に登り着いた。

金助は忽ち黄金像になり、紫磨黄金の膚美はしく、葡萄の冠を戴きながら、咲き亂れたる五色の花の上に安坐してゐた。

銀公「ヤー此奴は金助によく似て居るぞ。金助は其名の如く、全部黄金に化つて了ひよつた。

オイ皆の者、これだけ黄金があれば大丈夫だ。六人が棒を作つて歸り、分解して各自に吾家の財産をすれば大したものだぞ」

鐵

「まだそれでも目がギョロ／＼廻轉し、口がバクツイてゐるぢやないか。こんな未成品を持つて歸つたところで、中心まで化石舌化金してゐない。暫らく時機を待つて、うまく固まるまで捨て、置かうぢやないか」

カナン「一時も早く持つて歸らなくちや、鷹鳥姫の部下に占領されて仕舞ふ虞れがある。コリヤ魔谷ヶ岳の或地點まで擔いで往かう。さア、早く用意をせい」

熊、蜂の兩人は携へ持つた鎌にて手頃の木を伐り棒を作つてゐる。スマートボールは此の坐像の周圍をクル／＼廻り、指頭を以て抑へながら、

「ヤーまだ少し温味があり、血が通うてゐるやうだ。こんな化物を迂調り擔ぎ込まうものなら、こんな事が起るかも知れない。オイ皆の奴、此儘にして歸らうぢやないか」

金の像「貴様等は執着心の最も旺盛な奴輩ぢや。この金助が化体の一部たりとも動かせるもの

なら動かして見よ。宇宙の關門最勝妙如來が坐禪の姿勢、本來無一物、色即是空、空即是色、一念三千、三千一念の宇宙の理法を知らざるか。娑婆の亡者共、吾こそは今迄の匹夫の肉体を有する金助に非ず、紫磨黄金の膚を化したる三界の救世主であるぞよ』

「ヤー愈怪しくなつて來た。譯の分らぬこを言ひ出したぞ。オイ金助、モット俺達の耳にもわかるやうに言つて呉れ』

『宇宙一切、可解不可解、凡耳不徹底、凡眼不可視』

『ますます譯の分らないこを云ふぢやないか。オイ金州、洒落ない。貴様は何故元の金助に還元せないのだ。何程貴い黄金像になつて見たところで、身体が利かねば仕方がないぢやないか』

『如不動即動是、如不言即言是、如不聽即聽是、顯幽一貫善惡不二、表裏一体、即身即佛』

即凡夫』

『ますます分らぬこを言ひやがる。オイこんな代物にお相手をしてゐたら、莫迦にしられるぞ。モ一歸らうぢやないか』

銀公 『これが見捨て、歸られようか、賣の山に入りながら一物も得ずして裸体で歸るこ云ふのは此の事だ。何處までも荒魂の勇を鼓し、六人が協心戮力此の黄金像を魔谷ヶ岳の隈ヶ淵迄連れて行かう。サア、皆の奴、一二三だ』

こ前後左右よりバラ／＼と武者振りつく。金像は一つ身懷ひをするよと見る間に、六人の姿は暴風に蚊軍の散るが如く、四方八方に目にまらぬ許りの急速度を以て飛散して了つた。

金像は体内より鮮光を放射し、微妙の靈音を響かせながら、ムク／＼と動き始めた。忽ち三丈三尺の立像に變じ、鷹鳥山の山頂にスツクミ立ち、南面して瀬戸の海を瞰下し、兩眼よりは

日月の光明を放射し始めた。

鷹鳥山は暗夜に雖も光明赫灼として、数十里の彼方より雲を通して其の光輝を見るここを得るに至つた。

これ果して何神の憑依し給ひしものぞ。説き來り説き去るに随つて、其の真相を不知不識の間に窺知するここを得るであらう。

(大正一一・五・二六 舊四・三〇 外山豊二録)

瑞 月

陸奥の安達ヶ原にも人知らぬ

神のめぐみの花ぞ咲きぬる

第二章 銀公着瀑 (七〇四)

鷹鳥山の中腹の岩の根に庵を結び、三五教の教の御柱を築かむ立籠りたる鷹鳥姫、若彦、玉能姫の三人は、何か心に期する所あるものの如く、谷川に下り立ち、禊身を修して居る時も、中空を掠めて鳩の如く降り來れる一人の男、瀧壺にザンブミばかり落ち込んだ。三人は俄の出來事に驚いて目を睜り、瀧壺を熟視すれば、水面の艇りに揺られて浮き上り來る男の姿、

『こは大變』

若彦は身を躍らし瀧壺に飛び入り、小脇に引抱へ漸くにして救ひ上げた。これは二十四五歳の元氣盛りの男の姿。種々耳近くに口を寄せ、

『オーイ〜』

魂呼びの神術をなし、天の數歌を力限りに唱ふれば、漸くにして息吹き返し、四邊をキヨロく見廻しながら、三人を見て、

「此處は何處で御座います。私は何時の間に此様な所へ來たのでせうか、見知らぬお方ばかり……貴方様は何と言ふお方で御座います」

若彦「此處は鷹鳥山の中腹、三五教の教の射場（教場）、鷹鳥姫の御住家だ」

「何卒忪へて下さいませ。生命ばかりはお助けを願ひます」

「生命を助けてやつたお前さまを、誰が又生命をこるものか。ちこ氣を落ち着けなさい。

お前さまは何と言ふ名だ」

「ハイ、私は名は確か……銀と言つた様に覺えて居ます」

「アハ、自分の名を、銀と云つた様に覺えて居ることは、ちつと可笑しいぢやないか。

今見て居れば天から降つて來た様だが、一体何處の國から來たのだ」

「ハイ、一寸待つて下さい。さう短兵急にお尋ねになつても、魂が何處か宿替したと見えて、はつきりとお答へが出來ませぬ」

「ア、さうだらう、無理もない。大空から降つて來たのだから。まあゆつくり着物を着替へさして上げるから、此處で休んで氣を落着け、其上で物語をしたが宜からう。鷹鳥姫さま、さうも妙な事があるものですか」

鷹鳥姫「何れ日の出神様の御子さまが澤山あると言ふ事だから、妾等が誠を憐み給うて天から

應援に來て下さつたのかも知れませぬ。兎も角大切に扱はねばなりませんまい。さアく

玉能姫さま、貴方は衣服を着替へさして上げなさい」

玉能姫は、

「アイ」

「答へて若彦の着替を持ち出し、男に着替へさせ、手を引きながら一室に連れ込み静かに寝させ、男の濡れた衣を絞木の枝に懸けて乾かさうとして居る。」

若彦「コレ、玉能姫、其着物の裏に何か標はついて居ないか。よく調べてお呉れ」

「言ひすて再び鷹鳥姫と共に以前の瀧壺の傍に至り、天津祝詞を奏上し頻りに水垢離にかゝり始めた。」

玉能姫は衣を干しながら詳細に何か標は無きやと探す中、「銀」と言ふ印に目が付いた。

「ハア……最前銀と言ふ様に思ひますが、彼の方が言つたのは、矢張り現でもなかつたらしい。それにしても大上から彼の淵へ天降つて来るのは何か理由がなくてはなるまい。一つお氣の鎮まつた折を考へて詳しく尋ねて見よう」

「獨語ちつ、男の横臥せる枕許に進み寄り見れば、以前の男は床上に起上り、不思議さうに四邊をキヨロク見廻して居る。」

「モシく貴方、お氣分は如何です」

「ハイ、大變に氣分が良くなりました。然し此處は何云ふ所で御座いますか」

「此處は鷹鳥山の三五教の射場です。貴方は天から真逆様に瀧壺へ降つて御座つたが、一体何處から御出でになつたのです」

銀公は三五教の射場を聞いて心に打驚き、

「ヤア、大變だ。知らず識らずに黄金像に撥ね飛ばされて、敵の中へ落ち込み敵に救はれたのか。こりや迂濶バラモン教だなと言はうものなら大變だ。何か良い考へはあるまいか」

腕を組んで思案に暮れて居る。

「何卒仰有つて下さいませ。今貴方のお召物を絞つて干します時に、銀云ふ標が附いて居ました」

聞いて銀公は一層心に打驚きしが、さあらぬ態にて、

「私は無住所如来と言つて、天にも住み、地にも住み、時としては地中にも住む者で御座います。銀の字の印のついたのは銀河を渡る時、柵機姫様に餘り着物が古くなつたので替へて貰つたのです。此處は矢張り地上ですか。天上の國から見れば、お話にならない

穢しい所ですな」

「天上の國はそれ程綺麗ですか」

「へえ、それはく比較になりませぬ」

「貴方は何か、天からお降りになつたと言ふお證を持つて居られますか」

「ハイ持つて居ましたが、中空に於て悪魔の群に出會し盗られて了ひ、その爲めに通力を失つて不覺をこり、此處に顛落したのです。然し無住所如来の私、無は即ち有、有即ち無、何處も彼處も吾々の自由自在の遊樂地ではありませんが、餘り地上は穢れて居るので住むべき所がなく、本當の……今は無住所如来になりました。アハ、ハ、ハ、」

空惚ける。玉能姫は怪訝な顔してマジ／＼銀公の顔を凝視め、

「ヤア、お前は……」

頓狂な聲を出し倒れむばかりに驚いた。男は此聲に、

「發見されたか、一大事」

一生懸命に駆け出さうとする。玉能姫はグツミ襟首を後より掴んで其場に引き据ゑ、

「汝はバラモン教のカナンボールが部下の者、銀公も言ふ悪者だらう。いつやあ妾が清泉へ靈水を汲みに行つた時、四五の同類と共に妾に向つて無理難題を吹き掛け、手籠に致した奴であらうがな」

「ソ、ソ、ソ、そんな事があつたか存じませぬが、餘り事件が多いので、ねつから記憶に浮びませぬワ」

「事件が多いとは悪事の數々を重ねたミ云ふ事だらう。サア、もう斯うなる上は此儘では歸さぬ。飽までも言靈を以て責めて上げねばなりません。マア氣を落着けてお坐り下さい」

銀公は口の中で、

「此奴一人なら……さうなつて逃げてやるのだが、まだ外に大將が二人、信者の奴が

澤山にウロ／＼出入りをして居るから、逃げる事も出来ず、ハテ、困つた事だなア」  
「終ひの一句を思はず高く叫んだ。玉能姫は之を聞き、

「困つた事だとは、そりや何をおつしやる。善言美詞の言靈を手向けてやらうミ云ふのだよ」

「そんなら血を出すのだけは堪へて下さいませ。言靈には誠に困ります」

「バラモン教で言靈ミ云へば、如何なものだなア」

「ハイ、バラモン教の言靈は、例へば此處に一人の道を破つた者が現はれたミすれば、其處に居る全部の人が、五十人あらうが千人あらうが、一人々々悉く手頃の石を以て頭を小突いて血を出します。それを贖罪の證ミするのです。此處にも餘程澤山のお人が居られますが、一つ宛やられても大變だから、之だけは特別を以て御免除を願ひます」



「ホ、、、、三五教の言靈は善言美詞の祝詞を奏上して、神界へお詫する事です」

「お蔭で私の頭も助かりました」

ミやつミ安心の態にて額を撫でて見て居る。

鷹鳥姫、若彦二人は禊身を終り、數多の信徒と共に悠々として此場に入り來り、

鷹鳥姫「ア、お前さま、氣分は如何だなア」

銀公「ハイ、思ひも寄らぬ御厄介を掛けまして、其上着物まで拜借致しまして、又言靈までお

許し下さいまして、こんな有難い事は御座いませぬ」

若彦「三五教の言靈はバラモン教は些つミ違ふのだよ。さう御遠慮には及びませぬ」

「ハイ有難う御座います。然し三五教の言靈を聞きますと、矢張り石で小突かれた様に頭が痛くなり、胸が苦しくなりますから……御厄介になつた上に御厄介になるのも濟みま

せぬから、之ばかりは御辭退申します」

若彦は一寸見て、

「ヤア、お前はバラモン教の銀公ぢやないか。随分玉能姫を苦しめた者だねえ。玉能姫を

苦しめて呉れたお禮に、善言美詞の言靈で御禮を申し上げようか」

「さう現銀に仰有らないでも宜いぢやありませんか。金……金……金公がそれはく偉い事ですぜ」

鷹鳥姫「あの金公が、何ぞ又悪い事を企んで居るに云ふのかい」

「い、え、悪い事を企む様な奴なら、ちつミは氣が利いて居るのだが、薩張り此頃は呆氣で仕舞つてカン／＼になりました。終には私を中天に捲き上げて斯んな目に遇はしたのですよ」

「これ若彦さま、此男は妙な事を云ひますな」

「そりや、あんな妙な事があるのだもの」

若彦「ごんを事があるのだ。さつき云つて見なさい」

「金の奴、俄に黄金佛になつて仕舞ひ、譯の分らぬお経を百萬陀羅尼轉るのです。あいつの身体から光が現はれて、空の雲まで色が變つて居ませうがな。一寸外へ出て、空を見て御覽」

若彦は妙な事を云ふ奴だこ呟きながら戸外に飛び出し眺むれば、鷹鳥山の山頂に光煌々として輝き、空の色まで金色に照して居る。若彦は慌しく入り來り、

「鷹鳥姫さま、大變です。金色燦然として四邊眩ゆきまで照り輝く、異様の神人が現はれたと見えます。而も鷹鳥山の山頂に……こりや屹度三五教の爲めには大占瑞でせう。オ

イ銀公さま、お前さまも行かないか」

銀公「又空中滑走をやらねばなりませんから、近寄つてはいけません。然し貴方等はお出でなさいませ。そして肩や背中を撫でておやりなさいませ。金像がブリツミ肩を動かしたのが最後、中天の空まで……飛行機ぢやないが……上りつめ、又瀧壺へ眞逆様に陥ち込む云ふ藝當が演ぜられます。私はもつ懲々しました。金像の金の字を聞いても膽が潰れます」

若彦「お前は金銀を得むが爲めに今迄利己主義の行動を續けて來た男だから、閻魔さまでも忽ち地藏顔になる云ふ金の顔を見るのは餘り悪くはあるまい。サアノ行かう、お前のやうな者を留守させて置けば、如何な事するか分つたものぢやない。留守の間に赤臆でも這はされたら大變ですよ」

「滅相な、生命を助けて貰つた恩人の館に、赤臆を這はして済みますか。いたちて神妙

にお留守をいたちます。何卒早く貴方等、探險にお出でなさいませ』

鷹鳥姫『如何しても銀公さまが動かぬ云ふのだから、若彦さま、お前さまは此處に銀公さまの監督がてら留守して居て下さい。玉能姫さまも二人、探險に行つて参ります』

さ欣々として山頂の光を目標に登り行く。鷹鳥姫、玉能姫の二人は鷹鳥山の光目標に登り見れば、銀公の云うた金像は脊の高さ五丈六尺七寸もあらうかと思はる、許りに伸長して突立ち、二人の姿を見るより、鷹鳥姫を左手に引摺み、

『オイ、まだ俺の所へ来るのは早い、もこへ歸れ』

猫の首筋を掴んだ様に鷹鳥山の中腹目蒐けてボーミ放つた。右の手に玉能姫を同じく提げノソリノソリ五歩六歩東に向つて歩み出し、

『お前は彼邊へ行け』

またボーミ投げた。忽ち金像は煙になつて、巨大な爆音と共に消えて了つた。後に金助の肉體は、

『ア、ア、偉い神さまになつたと思へば、矢張り元の金助か。こりや、マア、如何した譯だらう。何は兎もあれ、もう斯うなる以上は三五教の信者だから、鷹鳥姫さまの庵を訪ねて歸順の意を表し、使つて貰はうか』

と獨語しつゝ、山頂を降り行く。

茲に金助は鷹鳥姫の庵に來り、銀公と共に改心の意を表し、若彦の股肱になつて神業に参加する事となつた。あ、此金助を包み居たる黄金の立像は何神の化身であらうか。

(大正一一・五・二六 舊四・三〇 北村隆光録)

瑞月

世の中の人の心に誠あらば

神の心も静けかるべし

東の御空はらして昇ります

月の光の瑞々しけれ

日本魂奮ひ起して葦原の

醜草はふるも神の友垣

第四篇 改心の幕

第三章

寂

光

土 (七〇五)

嵐のたけぶ魔谷ヶ岳

蜈蚣の姫を教主とし

捧げて盡す金助も

神の御稜威も鷹鳥の

流れも清き清泉

心の園に一輪の

直に開く大御空

光隈なく照り渡り

バラモン教に立籠る

朝な夕なに真心を

心の駒を立直し

山の谷間に湧き出づる

魂を洗ひて忽ちに

花の薫りを認めてゆ

高天原に日月の

娑婆即寂光浄土の眞諦を

寂 光 土

悟るや忽ち黄金の  
 輝き渡る神御靈  
 身の丈三丈三尺の  
 鷹鳥山の山頂に  
 茲に彌勒の靈体を  
 折しもあれや玉能姫  
 光を求めて岩ケ根の  
 近づき見れば金像は  
 巨体三變じ給ひつゝ  
 神の司や玉能姫  
 衣に包まれ煌々  
 紫磨黄金の膚清く  
 三十三魂成り變り  
 宇宙萬有睥睨し  
 現じて四方を照しける  
 鷹鳥姫は山上の  
 庵を後にエチノミ  
 五丈六尺七寸の  
 左右の御手に鷹鳥の  
 物をも言はず驚攔み

中天高く投げやれば  
 姫の司は忽ちに  
 投げ返されて胸をつき  
 道の繚奥を細々  
 玉能の姫は中天に  
 再度山の山麓に  
 木々の若芽も春風に  
 鎮まりいます聖場へ  
 遠き神代の昔より  
 五六七神政の經緯地

翼なき身の鷹鳥の  
 元の庵に恙なく  
 心鎮めて三五の  
 奥の奥まで探り入る  
 玉の如くに廻轉し  
 落ちて生田の森の中  
 薫る稚姫君の神  
 端なく下り着きにけり  
 皇大神の定めてし  
 時節を待つて伊都能賣の

貴の御靈の姫神うぶのみたまのひめがみ  
 此世を忍ぶ李助このよをししのりすけが  
 生れ出でませし初稚はつわかの  
 清く仕ふる三つ御靈きよくつかふるみつみたま  
 四海を照らす神徳よかいをてらすしんとくを  
 花咲く春の先驅はなさくるはるのさきがけを  
 あゝ惟神々々あゝいひなみ  
 鷹島山の頂たかじまのいただきに  
 深き經綸の蓋開けてふかきしじゆのふたあ  
 聖磐常磐の松の世かぢはとこはまつの  
 仕へて茲に時置師つかへてこゝにときおかし  
 妻のお杉の腹を藉りつまのおすぎのはらをか  
 姫の命と諸共にひめのなともろとも  
 三五の月の皎々さんごのつきのかうかう  
 暫し隠して岩躑躅しばしかくしていはつじ  
 仕組ませ給ふ尊さよしぐませたまふたまた  
 御靈幸はひまし／＼てみたまさち  
 示現し給ひし彌勒神しげんしたまひしみらくしん  
 輝き給ふ時待ちしきらきたまふときまちし  
 榮え目出度き神の苑さかえめでたきかみの苑

花は紅葉は縁はなはくれはるはえん  
 彩る神代の祥瑞いろするみよのよきあきに  
 百の神々百人もひのかみぐもひとは  
 老木若木の差別なくおきわかぎのけちの  
 樹てる小松の蠶々たてるこまつのつくつく  
 受けて日に夜に伸ぶる如うけてひによにのぶるごと  
 黄金閣の頂上わうこんかくのたかみに  
 貴の瓢の永久うぶのひやくのとこしへに  
 語るも嬉し神館かたもうれしかみやかた  
 言葉の花を翳しゆくことばはなをかげしゆく  
 天三地は紫あめつちみはむらさに  
 天津神等國津神あまつかみたちくにづかみ  
 雄島雌島の隔てなくおしめのしめのへに  
 榮ゆる御代に大八洲さかゆるみよにおおやしま  
 天津御光月の水あまつみひかりづきのみづ  
 進む神代の物語すすむかみよのものごと  
 輝き渡る日地月きらきわたるにちちげつ  
 開くる御代の魁ひらくるみよのさきがけを  
 月の桂を手折りつゝつきのかぐろを手おろし  
 醜の魔風の吹き荒びしづのまかぜのふきあび

朽ちよ果てよと迫り来る  
 松の操のまごこまでも  
 固き心は山櫻  
 ひきて返さぬ桑の弓  
 五六七の代まで傳へ行く  
 心眞澄のいこ清く  
 咲き匂ひたる教の花  
 開き始めて北村氏  
 海の内外の山川も  
 豊の恵二浴しつゝ、

曲の嵐も何のその  
 神の御業に仕へずば  
 大和心のまごこまでも  
 言葉のツルを手繰りつゝ  
 ミロ九の神代を松村が  
 山の尾の上に馥郁ミ  
 太折りて語郎善美世は  
 隆き御稜威も光りわたり  
 草木もなべて皇神の  
 神代を祝ふ神人の

稜威の身魂を照らさむ  
 いこ軟らかに長々  
 錦の糸を繰返し  
 鷹鳥山の高姫が  
 心の底より正覺し  
 仕へ奉りて素盞鳴の  
 悟り初めたる物語  
 風のまに／＼に迂り行く  
 御靈幸はひましませよ。

雪に焼める糸柳の  
 二十二卷の小田巻の  
 心も加藤説き明す  
 娑婆即寂光淨土をば  
 國治立の神業に  
 神の尊の神力を  
 言の葉車欣々  
 あゝ惟神々々

鷹鳥姫は玉能姫を伴ひ、山上の光を目標に登り行つた後に、若彦は金助、銀公の兩人に對し



三五教の教理を説き諭す折しも、如何はしけむ、金助、銀公の二人はキャツミ一聲叫ぶと共に其の場に倒れ、人事不省に陥つて了つた。若彦は驚いて谷水を汲み來り、二人の面部に伊吹の狭霧を吹き掛け、甦らさむと焦る折しも、風を切つて頭上より降り來る鷹鳥姫の姿に二度ビツクリ、近寄り見れば、鷹鳥姫は庭前の青苔の上に仰向けになり大の字になつて、

「ウン」

と云つたきり、ピリ／＼と手足を蠢動させて居る。若彦は周章狼狽爲す所を知らず、右へ左へ水桶を提げた儘駆けまはる途端に、鷹鳥姫の足に躓き、スッテンドウと其の上に水桶と共に打倒れた。水桶の水は一滴も残らず大地に吸収されて了つた。若彦は如何したものか、舉措度を失ひし結果、立上る事が出来なくなつて了つた。庭前の苔の上にやう／＼身を起し、坐禪の姿勢を取り、双手を組んで溜息吐息、思案に暮れて居る。

「嗟、金、銀の兩人と云ひ、力も頼む鷹鳥姫様は此の通り、介抱しようにも腰は立たず、加ふるに妻の玉能姫の消息はさうなつたであらう。神徳高き鷹鳥姫様でさへ斯の如き悲惨な目に遇ひ給うた位だから、吾妻も亦さつかの谷間に投げ棄てられ、木葉微塵になつたかも知れない。あゝ、神も佛もないものか」

と稍信仰の篤が緩まうとした。時しもあれや、バラモン教のスマートボール、カナンボールを先頭に、鐵、熊、蜂其の他數十人の荒男、竹槍を弱しながら此方を指して進み來り、此態を見て何ぞ思つたか近寄りも得せず、垣を作つて佇み居る。神殿に参拜し居りし七八人の老若男女の信徒は、此慘状を寄せ來る敵の猛勢に肝を潰し、裏口よりコソ／＼と遁れ出で、這々の態にて山を驅登り、何處にもなく消散して了つた。

山櫻は折柄吹き來る山嵐に打叩かれて、繽紛として散り亂れ、無常迅速の味氣なき世の有様

を遺憾なく暴露して居る。若彦は漸く吾に返り言葉を。

「あゝ兵は強ければじび、木硬ければ折れ、革固ければ裂く。齒は舌より堅くして是れに先立ちて破るこかや。吾々はミロクの大神の大御心を誤解し、勝に乗じて猛進を續け、進むを知つて退き、直日に見直し聞直し、宣直す事を怠つて居た。日夜見直せ宣直せの聖言も、機械的無意識に口より出づる様になつては、モウ駄目だ。あゝ過つたりく。」

積む雪に携め折れぬ柳こそやはらかき枝の力なりけり

こは言依別命様の御宣示であつた。慈愛深き大神様は吾々に恵の鞭を加へさせ給うたのか、殆ど荒廢せむとする身魂を、再び練り直し給ひしか、あゝ有難し辱なし、神様、お赦し下さいませ。神や佛は無きものかこ、今の今まで恨みの言葉を申し上げました。柔能く剛を制すの眞理を、何故今迄悟らなかつたか。口には常に稱へながら有言不實行の罪

を重ねて来た吾々、實に天地に對し耻かしくなつて來ました。鷹鳥様が斯様な目にお遭ひなさつたのも、玉能姫の消息の分らないのも、吾腰の立たなくなつたのも此若彦が誤解の罪、實に神様は公平無私である。敵味方の區別を立つるは吾々人間の煩惱の爲す業、慈愛深き神の御目より見給ふ時は、一視同仁、敵味方なごの障壁はない。あゝ神様、あゝ此世を造り給ひし大神様、心も廣き厚き限りなき神直日大直日の神様、何卒々々、至らぬ愚者の吾々が罪、神直日大直日に見直し聞直し下さいませ。今迄の曲事は唯今限り宣り直します」

こ聲を曇らせ、バラモン教の一味の前に在る事も打忘れ、浩歎の聲を洩らして居る。スマートボールは聲も荒々しく、

「ヤイ三五教の青瓢箪、若彦の宣傳使、態ア見やがれ。金助、銀公の二人を貴様の宅に捕

虜にして居やがるのだらう。其天罰でバラモン教の御本尊大國別命様に睨み付けられ、鷹鳥姫は其感、貴様は又脛腰も立たず何をベソ／＼吠面かわくのだ。俺達はバラモンの教の爲に魔道を擴むる汝等一味を征伐せむが爲に實行團を組織し此場に立向うたのだ。これから此スマートボールが汝等一味の奴輩を、芋刺し、串刺し、田樂刺し、山椒味噌を塗付けて炙つて食つて了ふのだ。オイ泣き味噌、貴様も肝腎要の所で、大變な味噌を付けたものだなア。コリヤ鬼味噌、何を殊勝らしく祈つて居やがるのだ。天道様もテント御聞き遊ばす道理がないぞ。サアこれから顛覆だ」

三槍の穂先を揃へて前後左右よりバラ／＼に攻め掛る。悔悟の涙に暮れたる若彦は、最早心中豁然として梅花の咲き匂ふが如く、既に今迄の若彦ではなかつた。傲慢無禮のスマートボールが罵詈雑言も侮辱も、今は妙音菩薩の音楽か、彌勒如來の來迎か響くばかりになつて居る。

「ア、有難い。われも北光の神様になるのかなア。さうぞ早く目を突いて欲しい。慈に肉眼を所有して居るために、宇宙の光を認むることが出来ないのだ。ア、惟神靈幸倍坐世々々」

三一生懸命に心中に暗祈黙禱を續けて居る。スマートボールは、

「オイ、カナン、さうだ。これ丈勢込んでやつて來たのに、一つの應答もせず、又反抗的態度も行らない奴に向つて、攻撃するも馬鹿らしいぢやないか。如何したらよからう」  
「今こそ三五教を顛覆させるには千載一遇の好機だ、何躊躇逡巡する事があるか。一思ひにやつて了へよ、スマートボール」

「併し乍ら、お前は屋内に竊入り、金、銀の在處を探して呉れよ。俺は是から此奴等に引導をわたさねばならぬ。………オイ鷹鳥姫の婆、並びに若彦のへボ宣傳使、よつく聞け。

此世は自在天大國別命の治しめす世の中だ。然るに何ぞ、天則違反の罪を負ひて、永遠無窮の根底の國に、神退ひに退はれた國治立命や、現在漂浪の旅を續けて居る素盞鳴尊の悪神を頭に戴き、猫を被つて、天下を混亂させむは憎き奴共。天はバラモン教の蜈蚣姫が部下スマートボールの手を借りて汝を誅戮すべく此處に向はせ給うたのだ。サア此世の置土産、遺言あらば武士の情だ、聞いてやらう。娑婆に心を残さず、一時も早く幽界に旅立致せ。覺悟はよいか」

ミ部下に目配せしながら、竹槍をすこいてアッヤ一突にせむとする折しも、中空より急速力を以て降り來れる一塊の火彈、忽ち庭の敷石に衝突して爆發し、大音響に共に四面白煙に包まれ咫尺を辨ぜざるに立到つた。中よりコン／＼白狐の鳴き聲、谷の彼方此方に警鐘を亂打せし如く、頻りに聞えて來た。レコード破りの大音響に、失心して居た鷹鳥姫はハツミ氣が付き、

頭を上げて眺むれば、四邊白煙に包まれ、身は空中にあるか地底にあるか、判別に苦しみつゝ、獨り頭を傾けて記憶の糸を手繰つて居る。金助、銀公兩人もハツミ氣が付き、咫尺も辨ぜぬ白煙の中を腹這ひながら表に出で、若彦、鷹鳥姫の傍に知らず識らずに寄つて來た。忽ち空中より優美にして流暢な女神の聲にて、

「三五教の宣傳使鷹鳥姫、若彦の兩人、よつく聞かれよ。取別けて鷹鳥姫は執着の念未だ去らず、教主言依別命の示諭を輕視し、執拗にも汝が意地を立てむとし、神業繁多の身を以て聖地を離れ、此鷹鳥山に居を構へ、大神を齋り、汝が失ひし二個の寶玉を如何にもして再び取返さむと、千々に心を碎く汝の熱心、嘉すべきには似たれども、未だ自負心の暗雲汝が心天を去らず、常に悶々として至善至美なる現天國を惡魔の世界に觀じ、飽くまでも初心を貫徹せむと、迷ひに迷ふ其果敢なきよ。地上に天國を建設せむせば、先づ汝

の心に天國を建てよ。迷ひの雲に包まれて、今や汝は地獄、餓鬼、修羅、畜生の天地を生み出し、汝自ら苦む其の憐れさ。片時も早く本心に立復り、自我心を滅却し、我情の雲を拂拭し、明皎々たる真如の日月を心天心海に輝かし奉れ」

と嚴かに神示を宣らせ給ひ、御姿は見えねども、空中を歸り給ふ其氣配、目に見る如くに感じられた。鷹鳥姫は夢の覺めたる如く心に打諾き、

「ア、謬れりく、今迄吾々は神界の爲、天下萬民の爲に最善の努力を盡し、不惜神命の大活動を繼續し、五六七神政の御用に奉仕せしものと思ひしは、わが心の驕なりしか。ア、われ如何に心力を盡すも、無限絶對、無始無終の大神の大御心に比ぶれば、九牛の一毛だにも及び難し。慢心取違の……われは標本人なりしか、吁淺ましやく。慈愛深き誠の神様、何卒々々鷹鳥姫が不明を憐れみ給ひ、神業の一端に奉仕せしめられむ

ここを懇願致します。唯今より心を悔い改め、誠の神の召使として微力の限りを盡させ下さいませ。神慮宏遠にして、吾等凡夫の如何でか窺知し奉るを得む。今まで犯せし天津罪國津罪は申すも更なり、知らず識らずに作りし許々多久の罪穢を惠の風に吹拂ひ、助け給へ。ア、惟神靈幸倍坐世々々」

と兩手を合せ、感謝の涙に咽びながら一心不亂に天地の神靈に謝罪し祈願を籠めて居る。四邊を包みし白煙は忽ち晴れて、四邊を見れば此は如何に、鷹鳥姫が庵の前の苔蒸す花園であつた何處よりこもなく三柱の美人、上枝姫、中枝姫、下枝姫は、玉の如き顔貌に、梅花の笑ふが如き装ひにて現はれ來り、鷹鳥姫、若彦、金助、銀公の手を取りて引起し、懷より幣を取出して四人が塵を打拂ひ、勞はり助けて庵の内に進み入る。スマートボール、カナンボール以下一同は如何はしけむ、身体強直し、立はだかつた儘此光景を不審げに目送して居る。谷の木靈に

響く宣傳歌の聲、雷の如く聞えて来た。

(大正一一・五・二七 舊五・一 松村眞澄録)

山上氏脚部神經痛に

悩みける時詠める

瑞月

締めつけし冬の氷も朝日子の

光に解くるあし原の國

第一四章 初稚姫 (七〇六)

神が表に現はれて

此世を造りし神直日

唯何事も人の世は

身の過ちは宣り直す

誠の道を踏み外し

小さき意地に囚はれて

玉照彦や玉照の

別の命の御心を

初稚姫

善き悪きを立別ける

心も廣き大直日

直日に見直せ聞き直せ

三五教の宣傳使

心鷹ふる高姫が

錦の宮を守ります

姫の命や言依の

空吹く風のいさ軽く

二〇九

聞き流したる身の報い

鷹鳥山の頂きに

現はれ給ひし黄金の

神の化身が誠めの

礫に谷間へ顧落し

苦しき悶ゆる娑婆世界

心一つの持ちやうで

神の造りし此國は

天國淨土地獄道

自由自在に開けゆく

吾身の作りし修羅畜生

心の中の枉鬼に

虐げられて高姫は

清泉忽ち濁り水

湧きかへりたる胸の中

聞くも無残な今日の春

花咲き匂ひ風薫り

小鳥は歌ひ蝶は舞ふ

花ミ花ミに包まれし

常世の春も目のあたり

神の大道を白煙

深く包まれ目も鼻も

口さへ利かぬ淺ましき

それに續いて若彦が

血氣にはやる雄健びの

たけび外して久方の

天津空より降り來る

神の礫に身を打たれ

忽ち地上に倒れ伏し

息絶えくゝの瞬間に

心の開く梅の花

天國淨土の樂園を

初めて覺る胸の中

今迄犯せし身の罪や

心の汚れ忽ちに

悟りの風に吹き拂ひ

初めて此處に麻柱の

眞の司こなりにけり

あゝ高姫よ若彦よ

娑婆即寂光淨土ぞや

神も佛も枉鬼も  
 心を焦つ針の山  
 忽ち消ゆる水の靈  
 千座置戸の動に  
 拂はせたまふ神言を  
 尊き恵を忘れなよ  
 こは云ふものの拗けたる  
 正しき神の坐まさむや  
 恩頼を蒙りて  
 誠明石の浦風に  
 大蛇醜女も狼も  
 身を苦しむる火の車  
 神素盞鳴大神の  
 心の空の雲霧を  
 朝な夕なに嬉しみて  
 神は汝に俱にあり  
 身魂の主は何こして  
 あゝ惟神々々  
 心の岩戸を押し開き  
 眞帆をあげつゝ往く船の

浪のまに／＼消ゆるごご  
 海より深き罪咎を  
 赦はせたまへ神の子こ  
 若彦つゞいて玉能姫  
 バラモン教に仕へたる  
 カナンボールや鐵、熊や  
 早く身魂を立て直せ  
 善き惡きを立て別ける  
 月は盈つこも虧くるこも  
 誠一つの神の道  
 一日も早く八千尋の  
 祓戸四柱大御神  
 生れ出でたる高姫や  
 金助、銀公其他の  
 スマートボールを始めし  
 其他數多の教子よ  
 神が表に現はれて  
 朝日は照るこも曇るこも  
 假令大地は沈むこも  
 幾千代迄も變らまじ



變らぬ誠の一道に

向ひまつりて松の世の

光もなり花もなり

鹽もなりて世の中の

汚れを清め味をつけ

神の柱さうたはれて

耻らふ事のなき迄に

磨き悟れよ神の子よ

神に仕へし李助が

赤き心を立て通し

初稚姫の命もて

玉能の姫の神魂を

此處に伴ひ來りたり

汝高姫、若彦よ

神の御聲に目を醒ませ

心にかゝる村雲も

忽ち晴れて日月の

光照らすは目のあたり

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ。

ミ歌ひつゝ、時置師神の李助は、初稚姫を背に負ひ、玉能姫ミ諸共に此場を指して現はれた。

此宣傳歌の聲に鷹鳥姫、若彦、金、銀の四人は身体元の如く自由となりて立ち上り、李助の前に嬉し涙に咽びながら兩手を合せ、感謝の意を表し、恭しく首を垂れて居る。

李助『皆さま、大變なおかげを頂きましたア』

鷹鳥姫『ハイ、有難う御座います。餘り吾々の甚い取違ひで、今迄開いた口のすぼめやうが御座いませぬ』

若彦『御神諭の通りアフンミ致しました』

李助『随分澤山な警護の役人が、竹槍を持って御守護遊ばして居られますな。此方々は何時お出になつたのですか』

鷹鳥姫『ハイ、吾々の心に潜む悪魔を追出しに来て下さつた御恩の深いお方計りです』

若彦『此方々はバラモン教の蜈蚣姫さまの部下の方ださうです。厚いお世話になりました。何卒貴方から宜敷くお禮を云うて下さいませ』

體は棒のやうになつて強直したバラモン教の連中も、首から上は自由が利くので互に首を掉り、顔を見合せ、小聲になつて、

スミート『オイ、カナン、嫌らしい事を云ふぢやないか。散々悪口をつかれ、危ない目に遇はされた俺達に向ひ、禮を云つて呉れど吐かしやがる。この御禮は中々骨があるぞ。確りして居らぬぞ中空より飛行器墜落惨死の幕が切つて落さるかも知れない。困つたものだなア』

カナン『何ぞ云うても、この通り不動の金縛りを食うたのだから謝罪するより仕方がない。抵抗しよう云うた所で、こんな木像では何うする事も出来ぬぢやないか』

と囁いて居る。李助の背から下された初稚姫は一同の前に立ち、忽ち神憑り状態になつて仕舞

つた。一同は期せずして初稚姫に視線を向けた。初稚姫は言靜に、

『三五教の宣傳使鷹鳥姫、若彦其他一同の人々よ、八岐大蛇の猛り狂ふ世の中、暗黒無道の娑婆世界は云ひながら、汝等が心の岩戸開けし上は暗黒無明の此世も、もはや娑婆世界ではない、天國淨土である。娑婆即寂光淨土の、至歡至樂のバラダイスだ。汝等は八岐大蛇を言向け相し、ミロク神政の神業に参加せむと欲せば、先づ汝が心の娑婆世界をして天國淨土たらしめよ。この世界は汝が心によりて天國ともなり又地獄ともなるものぞ。風は清く山は青く、河悠久に流れ、木々の梢は緑の芽を吹き出し、花は笑ひ小鳥は歌ひ、蝶は舞ひ、自然の音楽は不斷に聞え、森羅萬象心地よげに舞蹈し、吾等の目を樂しましめ耳を喜ばせ、馨しき匂ひは鼻を養ふ。木の實は實り五穀は熟し、魚は跳ね、野菜は笑を含みて吾等が食ふを待つ。大道坦々として開け、鐵橋、石橋、木橋は架渡され、道往く旅人

も夕になれば旅宿ありて町噺に宿泊せしめ、湯を興へ食を興へ暖かき寝具を提供し、往く  
 として天國の狀況ならざるはない。遠きに往かむとすれば汽車あり、電車あり、郵便電信  
 の便あり、斯くの如き完全無缺の神國に生を托しながら、是をしも娑婆世界と觀じ、暗黒  
 無明の世と見るは何故ぞ、汝の心が暗きが故なり、身魂の汚れたる爲なり。宣傳歌に云は  
 ずや「此世を造りし神直日、心も廣き大直日」ミ、あ、斯の如き直日の神の神恩天の高  
 して百鳥の飛ぶに任すが如く、海の深く廣くして魚鱈の躍るに任すが如き、直日の心をも  
 つて一切衆生に臨めば、何れも皆神の光ならざるはなく恵ならざるはなし。鬼もなければ  
 仇もなし、暗もなければ汚れもなし。一日も早く真心に省み、一切に對して心靜に見直せ  
 聞き直せ、以前の誤解は速かに宣り直せよ。これ惟神なるミロクノ神の萬有に興へ給ふ大  
 御惠なるぞよ。あ、惟神靈幸倍坐世」

ミ云ひ終つて初稚姫は元に戻し、再び李助の背に愛らしき幼き姿を托した。

鷹鳥姫、若彦は一言も發し得ず地に嚙りつき、感謝の涙止め度なく身を慄はして居た。今迄  
 玉能姫と見えしは幽体にて、かき消す如く消え失せた。李助父子の姿も、如何なりしか目にも  
 止まらず、スマートボール以下の人々も何時しか消えて、白雲の漂ふ天津日は煌々として此  
 光景を見下したまひつゝあつた。あ、惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・五・二七 舊五・一 加藤明子録)

瑞 月

昨日まで人の事よと思ひしを

今日はわが身にふりかゝりける

## 第一章 情の鞭（七〇七）

時置師神、初稚姫、玉能姫は、忽然として此の場に姿を隠した。何時の間にか押寄せ來りしバラモン教のスマートボール以下數拾人の人影も、煙の如く消えて了つた。鷹鳥姫、若彦は互に顔を見合せ、不審の念に驅られながら、

鷹鳥姫「これ若彦さま、なんぞ不思議ぢやありませんか。私は貴方に御留守を頼み、此山の頂きに玉能姫さまを登つて見れば、黄金の立像四邊眩ゆき許りに輝き給ひ、莊嚴無比にして近づくべからざるやうでしたが、勇氣を出して御側近く立寄つたと思へば、左右の御手を伸ばして吾等二人を中空に投げ上げ給ひ、後は夢心地、覺めて見れば吾庵の庭先に倒れてゐました。さうして天より神様の聲聞え、いろ／＼の教訓を賜はりし時は、實に畏れ入

つて自分の今までの罪が山の如く前に現はれ來り、何とも云へぬ心の苦しさ。今迄の取違ひを全く覺り、神様に罪を赦されたと思へば、バラモン教の人は竹槍を以て、妾等二人を突き滅さむと攻め寄せ來る危機一髪の際、本助さまは初稚姫様を背に負ひ、玉能姫さまを伴ひ、宣傳歌を歌ひながら此場に現はれ、初稚姫様を背より下し給うたと思へば、初稚姫様は神憑状態に御成り遊ばし、娑婆即寂光淨土の因縁を細々御説き下され、ヤレ有難やと伏し拜むと見れば、三人の御姿は煙を消えて了はれた。不思議な事があればあるものだなア」

若彦「私も其の通りでございます。天から女神の聲聞え、いろ／＼の尊き教訓を賜はり、本助様一行も現に此處に御出でになつたのは、決して夢でも現でもありません。又蜈蚣姫の部下の人々が攻寄せ來たのも事實です。吾々二人は本助様親子に救はれたと同様です

から、黙つて居る譯には行きますまい。是から李助様の御宿を訪ね、御禮に参らねばなりませんまい」

「さうですかア、貴方御苦勞だが妾は此處に神様の御給仕をしながら、留守をしてるます。一度御禮に行つて来て下さい。金さま、銀さま、貴方も共に助けていただいたのだ。若彦さまと一緒に李助さまの宅迄、御禮に行つてお出でなさい」

金、銀一度に、

「ハイ、有難う、御供致します」

感謝の涙に咽ぶ。茲に若彦は口を嗽ぎ手を洗ひ、高姫、金、銀二人と共に、神前に向ひ、恭しく天津祝詞を奏上し、神言を宣り、庵を後に崎嶇たる山坂を傳ひくつて下り行く。

山麓の稍平坦なる大木の茂みに差掛る時しも、午睡をしてゐた拾數人の男、三人の姿を見る

よりスツクミ立ち上り、前途に大手を握げ、

「ヤ、其方は三五教の若彦であらう。汝は玉能姫云ふ魔神を使つて、俺達を清泉に投げ込んだ悪神の張本、手足も顔も傷だらけに致しやがつた。サア、これからは返報がやしして呉れむ、覺悟をせよ」

四方八方より棍棒打振り攻め来る。

若彦は飽く迄無抵抗主義を支持すれども、敵の勢餘り猛烈にして危くなりければ、四邊の枝振りよき松を目蒐けて猿の如く駆け上つた。金助、銀公の二人は松の小株を楯に取り、

金助「オイ、スマートボール、カナンボールの阿兄、その腹立は尤もだが、此の宣傳使の知つたことぢやない。貴様等が作った心の罪に落ち込んだのだ。敵は汝の心に潜んでゐるぞ。マア氣を落着けよ。貴様は今李助の娘初稚姫に危急を救はれて、雲を霞に遁げ去りな

から、其の御恩を忘れ、未だ三五教に敵意を含むのか。貴様冷靜に考へて見よ」

スアト「考へるも考へぬもあつたものかい。俺が何時李助の娘に救けられたか。莫迦を云ふない  
テンで鷹鳥姫の庵に行つたこともない。なア、カナン、妙なこみを金助の奴吐すぢやない  
か」

「吐すも吐さぬもあつたものかい、白々しい。僅か一人や二人の宣傳使に向つて、竹槍隊  
を引率し、芋刺しにして呉れむと、大人氣なくも襲撃して來よつたぢやないか。餘り空惚  
けない」

「貴様はちつと逆上せてるよるなア。これから俺が谷水でも掬つて飲ましてやらう」

「逆上せて居るのは貴様等ぢや。皆神様が貴様等のやうな分らん屋には相手になるなと云  
つて、若彦さまを此の松の木の頂上まで上らせてござるのだ。ちつと上せ様が違ふぞ。水

を飲ましてやるよと云ひよつたが、俺の欲する水は、飲めば直様、汗や小便になるやうな水  
ではない。乾くことなく、盡くることなき身魂を洗ふ生命の水だ。瑞の身魂の救ひの清水  
だ。サア、これから俺が飲ましてやらう。確かり聞けよ」

カア「金助の奴、貴様は筒井順慶式だな。腹の黒い裏返り者、サア、一つ目を覺してやらう。  
覺悟を致せ」

と迫り來る。

金助「アハ、、、俺の腹が黒いと吐すが、貴様が大將と仰ぐ蜈蚣姫は何うだい。身体一面眞  
黒ぢやないか。其の股肱に仕へてる貴様の顔は野山の炭焼さか、炭團玉か、但は屋根葺  
爺か、亞弗利加の黒ん坊か、鳥のお化けか、紺屋の丁稚か、岩戸を閉めた曲神か、得体の  
わからぬ眞黒々助。アハ、、、」

ミ肩を大きく揺り、二三度足で大地に餅搗きながら笑つて見せた。スマート、カナンは烈火の如く憤り、

「腹黒の二枚舌、腰抜け野郎奴、云はして置けば際限もなき雑言無禮、最早堪忍相成らぬ覺悟致せ」

ミ武者振りつく。金、銀二人は拾數人を相手にコロンツ／＼ミ格闘を始めた。松の大木の上より若彦は聲を張り上げて歌ひ出した。

「神の造りし神の國

恵みの露に潤ひて

大御寶ミ生れたる

世界の人は神の御子

人のみならず鳥獸

魚貝の端に至るまで

神の造りし貴の御子

互に憎み争ふは

吾等を造りし祖神の

深き心に背くなり

スマートボール其他の

バラモン教の人々よ

吾等も同じ天地の

神の御息に生れたる

斷つても斷れぬ同胞よ

愛し愛され助け合ひ

聖き尊き此の世をば

一日も長く存らへて

皇大神の降らしませ

恵の雨に浴し合ひ

互に心打ち解けて

四海同胞の標本を

世界に示し神の子ミ

生れし實をめい／＼に

擧げよぢやないか人々よ

三五教やバラモンミ

名は變れども世を救ふ

誠心は皆一つ

一つ心に睦び合ひ  
 手を引合うて神の道  
 心樂きバラダイス  
 松の縁の若彦が  
 心の魂を打開けて  
 真心籠めて説き諭す  
 三五教やバラモンミ  
 尊き神の御子にして  
 千代も八千代も暮さうか  
 汝が心の仇波は

下らぬ争ひ打ちりて  
 花咲く春をやすくゞこ  
 進み行く世を松の上  
 皇大神に照らされし  
 神より出でし同胞に  
 あゝ諸人よく  
 小さき隔てを打破り  
 清き此の世を永遠に  
 返答聞かせ早聞かせ  
 汝が心に立ち騒ぐ

波の鎮まる其の間  
 松の梢に安坐して  
 あゝ惟神々々  
 朝日は照るこも曇るこも  
 假令大地は沈むこも  
 人は残らず神の御子  
 親子兄弟睦び合ひ  
 手を引合うて樂まむ  
 善き惡きを別け給ふ  
 心も廣き大直日

この若彦は何時迄も  
 改心するを待ら暮す  
 御靈幸はひまませよ  
 月は盈つこも虧くるこも  
 神は吾等の御親ぞや  
 人一人は同胞よ  
 五六七の神代を永遠に  
 神が表に現れまして  
 此世を造りし神直日  
 唯何事も吾々は



互に胸を明かし合ひ

過ちあらば御互に

諫め交して天地の

神の心に叶ひつゝ

二つの教を解け合せ

誠一つの神界の

道に復ろぢやないかいな

道に進もぢやないかいな

これ若彦が一生の

バラモン教の人々に

對して願ふ真心ぞ

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

と歌ひ終つた。

俄に吹き來る春風に、松葉の戦ぎそよ／＼と、梢を傳ひ下り來る。此の言靈に辟易し、スマートボールを始めし、數多の人々一散に、雲を霞み走り行く。金、銀一度に、

「若彦さま、貴方の宣傳歌に依つて一同の者は、頭を抱へ尻引からげ、初めの勢にも似ず、雲を霞み逃げ散つて了りました。併し乍ら彼等こそ、良心の閃きはありませうが、さうぢや云つて決して油断はなりません。氣をつけて参りませうか」

若彦「マア急ぐに及ばぬ。バラモン教の人々に對し、私の宣傳歌が功を奏したか、奏しなかつたかは知りませぬが、兎も角吾々の進路を開いて呉れただけでも結構だ。此の松の木の麓に於て大神様に感謝の祝詞を献げませう」

と言ひ終り早くも拍手再拜、鷹鳥山の絶頂を目標に祝詞を奏上し始めた。若彦外二人が汗を流して奏上する英氣に充ちた顔を、遠慮會釋もなく山の春風が吹いて通る。

再度山の山麓、生田の森の中に庵を結ぶ左助の假住居、形ばかりの門戸を開いて入り來る三人の男があつた。その中の一人は若彦である。若彦は、

「頼みます〜」

三門の戸を叩いて訪へば、

「オー」

と答へて出て来る以前の奎助、素知らぬ顔にて、

「ヤーお前さまは若彦の宣傳使様、鷹鳥山の座に於て身魂を研き、旁御教を鷹鳥姫と共に四方に宣傳して御座るご聞いて居たが、今日は又如何なる風の吹き廻しか、此の奎助が隠家を訪ねて御越し遊ばしたのは、如何なる御用でございますか」

「最前は鷹鳥姫様始め吾々一同、いかい御世話になりました。御禮を申さむかと思ふ間もなく、貴方は初稚姫様、玉能姫と共に御歸り遊ばしたので、鷹鳥姫様も一つ、言葉の御禮に行つて来ねば濟まないから「若彦、お前御禮に行つて来い」この仰せ、遅れながら只今

参りました」

「此の日の暮紛れに三人連れで、此處へやつて来るごは合點が行かぬ。此の奎助は二三日前から闕一つ跨げた事はござらぬ。随つて貴方を最前ごやら御助け申した覚えはござらねば、何うぞ此儘御歸り下さいませ」

と膠も杓子もなく、榎で鼻を擦つたやうな挨拶振り、稍面を膨らし、目を凝視めて不機嫌顔、若彦は合點行かず、暫し答ふる言葉も知らなかつたが、思ひ切つたやうに、

「玉能姫は貴方の宅に御世話になつて居りませぬか」

「それを訊ねて何ごなる。三五教の宣傳使たるものは、一切を神様に任せ、總ての執着を去り、師匠を杖につかず、人を相手させず、親子女房血類を力にすなごの教ではござらぬか。何を血迷うて鷹鳥山の靈場に玉能姫を伴れ込み、穢らはしくも此の奎助の宅に玉能

姫は居ないかなぞこ以ての外の御心得違ひ、左様な腐つた魂の宣傳使には今日限り絶縁致します。此の闕、一歩でも跨げるなら、サア、跨げて見なさい」

奥には玉能姫の咳拂ひ、若彦の耳には殊更刺戟を與へた。玉能姫は李助に救はれ、此處に病氣の身を横へながら、若彦との問答を心痛めて聞いて居る。飛び立つばかり會ひたさ見たさに玉能姫は心は矢竹に焦れども、人目の鬨や、抜きさしならぬ李助の堅き言葉に遮られ、何返答もないじやくり、夜具に食ひつきハラ／＼と涙を袂に拭ひつゝあつた。

李助は二人の心を察し得ない程の木石漢にはあらねども、二人を思ふ慈悲心の波にせかれて涙を隠し、慙々嗚咽聲、

「ヤイ、黄昏のこゝこにて顔は儘かに分らねども、其の聲は若彦によく似たり。恐らくは若彦に間違ひなからうかも知れぬ。併し乍ら三五教には不惜神命的宣傳使の數多綺羅星の如

く、心の玉を輝かし神の教の道に猛進し、世人を導く身分にして女房に心を奪はれ、教の館を捨て、遙々訪ね來る如き腰抜けは一人も御座らぬ。汝は神の名否宣傳使の雅號をサツクミなし、此世を誑かる泥坊の類ならむ。汝の如き偽物、諸方を徘徊致すに依つて、第一三五教の面汚し、獅子身中否志士集團の團體をして腰抜け教に天下に誤解せしめ、神の神聖を冒瀆するもの、汝は是より己が住家へ歸り、一意専念身魂を研ぎ、名實相合する神人になつて、然る後宣傳使が希望ならば宣傳使になれ。それが嫌なら只今の儘流浪人になつて人の門戸を叩き、乞食の恥を曝すがよからう。斯く申す李助の心は千萬無量、推量致して名譽泥坊の二人と共に疾く此場を立去れ。又玉能姫もやらの宣傳使は、神界のため夫に暫く離れて素盞鳴大神の御楯となり、華々しき功名を致す迄、夫に面會は致すまいぞ」

こ聲張り上げて夫婦に聞かす李助が情の言葉、若彦は胸に鎚打たる、心地、兩手を合せ李助

の庵を伏し拜み、名残惜しげに振り返り、二人の男共、闇の帳に包まれてしまった。後に李助は聲を濕らせながら獨語、

「大神のため、世人のためは云ひながら、生木を裂くやうな李助が仕打ち、若彦必ず恨んで呉れな。それに就ても玉能姫、せめて一目なりは會はして呉れたなら良きさうなものだのに、氣強い李助であるに嘸恨んで居るであらう。最前初稚姫様の御知らせに依つて鷹鳥山へ救援に向ふ折しも玉能姫は御供をしよう云つた。其時無下に叱りつけ初稚姫様を背に負ひ、後に心を残しつゝ、宣傳歌を歌ひながら鷹鳥山が館に行つて見れば、神の御告に寸分違はず、悲惨の幕が下りて居た。玉能姫の幽体は又見えつ隠れつ來て居つたやうだ。嗚呼無理もない。併し乍ら今會はせるは易けれ言依別命様の御内命もあり、且又至仁至愛の大神様の厳しき御示し、何程玉能姫の心持を察すればきて、神様の仰には背かれず

神の教に人情の締木にかかつた此の李助の胸の苦しきよ。ア、兩人、今の辛き別れは勝利の都に達する首途、李助が心の中も些は推量して下され」  
「流石剛毅の李助も情に絡まれ、潜々落涙に咽んでゐる。奥には初稚姫、玉能姫が奏つる一絃琴の音、しこやかに鼓膜をそゝる。

(大正一一・五・二七 舊五・一 外山豊二録)

瑞 月

天地の神の御水火を蒙りて  
生れ出でたる人ぞ尊き

第一六章 千萬無量(七〇八)

「水の流れし人の行末  
淵瀬と變る世の中に  
夫ももなり妻もなり  
縁の糸に結ばれて  
うつゝの世ぞ知りながら  
進みかねたる戀の途  
日は照り渡り月は盈ち  
變らぬものは親ミ子の

昨日や今日の飛鳥川  
神の御水火に生れ来て  
親子もなるも神の世の  
解くる由なき空蟬の  
輪廻の雲に包まれて  
暗路に迷ふ淺間しき  
或は虧くる世の中に  
盡させぬ名残妹ミ脊の

深き契し白雲の

汝は東へ吾は西へ

南や北に彷徨ひて

いつかは廻り近江路や

美濃尾張さへ定めなく

神の恵を遠江

祈り駿河の富士の山

木花姫の御神に

願ひ掛巻く甲斐ありて

嬉しき逢瀬を三保の濱

浦風ぎ渡る羽衣の

松の響も爽かに

風のまに〜流れ行く

此世を救ふ生神の

貴の御楯と選まれし

神の任しの宣傳使

千變萬化に身を窶し

百の艱難を身に受けて

世人を救ふ真心の

凝り固まりし夫婦仲

千萬無量

二三九

鷹鳥山の頂に

黄金の光を放ちつゝ

衆生済度の御誓ひ

天國淨土の基礎を

堅磐常磐に固めむこ

治まる御代をみろくの世

國治立大神や

豊國姫大御神

神素煮鳴大神の

三つの御靈の神勅

頸にうけて世を開く

心の色も若彦の

夫の命は今何處

折角會ひは會ひながら

人目の關に隔てられ

其聲さへも碌々に

聞きも得ざりし玉能姫

果敢なき夢路を辿りつゝ

生田の森の吾思ひ

稚姫君の御靈

堅磐常磐に鎮まりて

再び神代を立直し

四方の天地神人を

救はせ給ふ經綸地

守るも嬉しき吾身魂

行末こそは樂しけれ

あゝ吾夫よ若彦よ

妾がひそむ此庵

遙々訪ね來ります

清き尊き御心

仇に歸せし胸の裡

うまらに細さに酌み取りて

必ず恨ませ給ふまじ

此世を救ふ生神の

在れます限り汝も吾は

又もや何時か相生の

松の縁の常久に

霜を戴く世ありとも

相互に昔を語りつゝ

歡ぎ樂しむ事あらむ

あゝ惟神々々  
 夫ご在れます若彦が  
 吾は女の身なれども  
 四方の身魂を慈しむ  
 胸に放さず天地の  
 心の限り三五の  
 心の底も不知火の  
 只皇神の御爲に  
 身は東西に生き別れ  
 神に任せし汝が命

御靈幸はひましまして  
 行末厚く守りませ  
 神を敬ひ天が下  
 清き心は東の間も  
 神に祈りて身の限り  
 誠一つを筑紫潟  
 世人は如何に騒ぐこも  
 夫婦心を協せつゝ  
 如何なる艱難の來るこも  
 妾も後より大神の

御言のまゝに白雲の

遠き國をば踏み分けて

神の司の宣傳使

山野を涉り河を越え

海に浮びつ常世國

高砂島の果までも

進みて行かむ惟神

御靈幸はひまませよ

こ一絃琴につれて歌の聲諸共に、幽邃に庵の外に響き渡りつゝあつた。

李助は慨歎稍久しうして、力なげに二女が琴を弾ずる其場に現はれ、

『初稚姫様、大變に音色が良くなりましたよ。玉能姫様、貴女の音色も餘程宜しいな、稍

悲調を帯びて居る様です。何かお心に懸つた事はありませぬか、心の色は直ぐに言靈の上

に現はれるものですから』

玉能姫『ハイ、餘り神様の思召が有難くて身に沁み渡り、又他人様のお情が胸に應へまして感

謝の涙に咽んで居ました」

「世の中は喜があれば悲がある、悲の後には度喜ばしい花が咲くものです。櫻の花は此通り夜の嵐に無残に散りましたが、梢に眺めた花よりも斯う一面、庭の面に散り敷く美しさは又一入ですな。人間は何事も神様の御心に任すより外に途はありません。如何なる艱難辛苦に遭遇する事も悔むものでは決してありません。私も一人の妻に死別れ、一度は悲しき鰥鳥の幼兒を抱へて浮世の無常を感じましたが「イヤ待て暫時、斯くなり行くも人間業ではない、何か深き思召のある事であらう。死別れた女房は不惑な様だが、大慈大悲の神様は乾度今より以上、結構な處へお助け下さるのであらう。あ、私が悔めば可愛い女房が神の御國へも能う行かず輪廻に迷ひ苦み悶えるであらう。忘れるが何よりだ」

「一念發起した上は却て獨身の方が結句氣樂で宜しい。斯んな事を言ふに「お前さまは無常な夫だ」心の底で蔑みも笑ひもなさらうが、さて何程悔んで見た所で仕方がない。お前さまも人間の身を以て此世に生れ、況して尊き宣傳使に使はれた以上は、世間の凡夫とは事變り、楽しみも一層深い代りに苦しみも亦一層深いでせう。其苦しみが神様の惠の鞭だ。何事があつても決して心配はなされませぬや」

「口には元氣に言へど、何もなく玉能姫が心も推量り、同情の涙の色が聲に現はれて居た。

玉能姫「何から何まで、御親切に有難う御座います。吾々夫婦の者を立派な神様にしたてゝやらつし思召し下さいまして、重ねぐの御心遣ひ、神様の様に存じます」

「琴の手をやめて、両手を膝に置き、俯向きて涙を隠す愛憐しさ。初稚姫は愛らしき唇を開き、

「神が表に現はれて

善悪を立別ける



此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

尊き神の御前に

魂の限りを捧げつゝ

誠一つの言靈を

朝な夕なに怠らず

讃へまつれよ惟神

御靈幸はひましまして

天が下なる悉は

餘さず残さず皇神の

心のまゝに幸はひて

安きに救ひ給ふべし

神は吾等ミ俱にあり

神は吾等ミ俱にあり

神の御水火を杖ミなし

誠の道を力ミし

荒浪猛る海原も

虎伏す野邊も蠢々ミ

何の艱もあら尊ミ

勝利の都へ達すべし

賞めよ讃へよ神の恩

盡せよ竭せ神の道

盡せよ竭せ人の道

人は神の子神の宮

人は神の子神の宮

ミ歌ひ終つて又もや一絃琴を手にし、心地好げに微笑を浮べて居る。

俄に窓の外騒がしく十數人の足音、バタ／＼と聞えて來た。折柄昇る月影に顔は確ミ分らね

ミ人影の蠢めく姿、手にさる如く三人の目に入つた。見れば大喧嘩である。一人の男を引縛り

李助が庵の窓前に運び來り、寄つて集つて拳骨の雨を降らして居る。

甲 「ヤイ、往生いたしたか、吾々バラモン教の信徒を惡神扱ひしやがつて、鷹島山に巢を構

へ、貴様の女房の玉能姫に魔術を使はせ此方を清泉の真中へ放り込み、身体に澤山の手疵

を負はせやがつた、其返報がへした。サア、もう斯うなつては此方のもの、息の根を止め

て十萬億士の旅立さしてやらう。こりや若彦、能うのめくく生田の森まで彷徨うて來よつたなア」

こ又もや鐵拳の雨を所構はず降りして居る。

現在眼の前に夫が打擲されて居る實況を見たる玉能姫の心は張り裂ける如く、假令天地の法則を破るこも、飛びか、つて悪者に一太刀なりと酬いたきは山々なれど、泰然自若たる李助に心惹かれ、苦しき胸を抱き平氣を装うて居る。

李助「玉能姫さま、何と面白い事が出來ましたな。坐ながらにして窓の内から活劇を見せて貰ひました。之も有難き思召でせう。サア早く神様に感謝の祝詞を奏上なさいませ。私はゆつくり此活劇を見物致しませう。神様が如何しても使はねばならぬ必要の人物と思召したならば、假令百萬の敵が攻め來るこも、如何に鐵拳の雨を蒙るこも、鶴の毛で突いた

程の怪我も致しますまい。何處の人かは知らねども、貴女の夫の名によく似た若彦と言ふ男らしう御座います。さてもく腑甲斐ない男もあつたものだなア。アハ、、、」

こ作り笑ひに紛らす。玉能姫は心も心ならず、轟く胸を抑へながら靜に天津祝詞を奏上し始めた。何となく聲は震うて居た。地上に投げられ數多の悪者に苛責まれ居た若彦の身体より、忽ち五色の靈光發射し、ドンミ一聲、不思議の物音に李助、玉能姫は窓外を眺むれば、人影は何處へ消えしか跡形もなく、窓近く一つの白狐ノソリノ太き尾を下げて森の彼方に進み行く

李助「アハ、、、神様は何處迄も吾々の氣をお惹き遊ばすワイ」

玉能姫は兩手を合せ、

「惟神靈幸倍坐世」

初稚姫「皇大神守り給へ幸へ給へ」

大正野球團へ

瑞 月

宇内に冠たる大正の  
正義の玉を手に取りて  
活機臨々又臨々  
青雲たなびく極みまで

日々新聞野球團  
世界を照らす日本魂  
月日の光を身に浴びて  
一瀉千里に撃ちつけよ。

第五篇 神界經綸

第一七章 生田の森 (七〇九)

三千世界の梅の花

薫りゆかしく實を結び

四方の春野を飾りたる

櫻も散りてむらくミ

咲き亂れたる卵の花の

白きを神の心にて

生田の森の片ほこり

花を欺く玉能姫

初稚姫の二人連

初夏の景色を眺めつゝ

再度山の山頂に

神の御告を蒙りて

登り行くこそ床しけれ。

李助は唯一人神前に祝詞を奏上する折しも、門戸を叩き、

生田の森

「頼まう〜」

を訪る、一人の宣傳使があつた。李助は神前の禮拜を終り、門の戸を開き、

「ヤア、其方は國依別の宣傳使、何用あつて李助が館を御訪ねなかつたか」

國依別はツミ門の敷居を跨げ、李助と共に座敷に通り、煙草盆を前に置きながら二人向ひ合せ、

「今日参つたのは餘の儀では御座らぬ。あなたは折角三五教に入りながら此頃の御様子怪しからぬ事を承はる。事の實否を探らむ爲、國依別宣傳の途中、紀の國より取る物も取り敢へず引返し、こゝに参りました。あなたは太元教をかを立てて居られるさうだ。神様に對し御無禮では御座いませぬか」

李助大口を開けて高笑ひ、

「何事ならむかと思へば、左様な御尋ねで御座るか。李助が折角の信仰を離し、太元教を新に開いたのは餘の儀では御座らぬ。其理由に致す所は、此李助三五教の信者を標榜し居るに、腰袂の宣傳使や信者が、言依別様の御命令だに何か言つて、旅費を貸せぬか、履物を出せぬか、いろ〜雑多の厄介をかけ、小便や糞をひりかけ後は知らぬ顔の半兵衛さん。それも一人や二人なれば辛抱致すが、終釋として蟻の甘みに集ふが如く、イヤもう煩雜くて堪り申さぬ。李助の家でさへも此通りだから、其他の信徒は思ひやらの。それ故心の内にて三五教を信ずれども、表面は太元教に、見らるゝ如く大看板を掲げたので御座る。國依別殿、其方も其亞流では御座らぬか」

「そんな奴は三五教には一人もない筈です。大方バラモン教の奴が、三五教の假面を被つて居るのでせう」

「バラモン教もチヨコくやつて来る。併し乍ら教の建て方が違ふものだから、先方も遠慮を致して居る。唯李助が忙しきタイムを奪つて歸る位なものだ。金銭物品まで借用しようとは申さぬ。宣傳使たる者は未だ教の及ばざる地方又は人に對してこそ宣傳の必要あれ、一旦入信したる者の宅に何時もなく訪問致し、厄介を掛け、安を求むる如きは宣傳使の薄志弱行を自ら表白するものだ。そなたも李助館に訪問する時間があらば、なぜ其光陰を善用して、未信者の宅を訪問なさらぬか。半時の間も粗末に空費する事は、宣傳使として慎むべき事でせう。サア一時も早く歸つて下され、お茶を進ぜたいが、茶を飲ませては、信者の吾々忽ち貧乏神に襲はねばならない。假令番茶の一杯でも小判の端だ。それを進ぜた所で……何だ李助は、折角訪問してやつたのに番茶を飲まして追ひ返した……云はれては一向算盤が合ひ申さぬ。愚圖々々して御座るこ、第一タイムの損害、疊が

汚れる。さすれば又もや表替をそれ丈早く致さねばならぬ道理だ。最早李助は三五教に食はれ、飲まれ、借り倒され、逆様になつても血も出ない様な貧乏になつて了つた。斯んな貧乏神の館へ出て来るよりも、巨萬の富を積みながら、此世の行末を案じ、吾身の無常を託ちつゝある憐れな精神上の極貧者は、世界に幾らあるか分らない。物質に富み、無形の實に飢ゑたる人を求めて神の教を説き諭し、錆びず朽ちず、火に焼けず、水に流れぬ尊き實を與へて、物質上の實を自由自在に氣樂に使用したが宜からう。精神上の實に充たされ物質上の實に缺乏を告げたる此李助の館に、宣傳使の必要は少しも御座らぬ」

「あなたは此春頃から心機一轉、餘程各臭くなられましたなア」

「何だかお前さまの聲を聞くに直に、此通り各臭くなつたのだ。心貧しき力弱き其方の守護神が、李助の体内に飛び込んで、斯様な事を吐き出して居るのだ。此李助は何にも知らぬ

早く國依別さま、心の貧乏神、柔弱神を追ひ出して、連れて歸つて下さい。李助真に迷惑千萬で御座る。アハ、、、、』

小腹を抱へ、體を大きく揺つて、ゴロンと笑ひ轉けて了つた。

國依別『さうして初稚姫様、玉能姫様はここへお出でになりましたか』

李助仰向になつた儘、足をニューと天井の方に直立させ、

『初稚姫、玉能姫は「國」ミか云ふ貧乏神がやつて来るから、憑依されてはならない云つて一時許り前に逃げ出しました。折角結構な神様が李助の館にお鎮まり遊ばすのに、腰抜神の貧乏神がやつて来るものだから、肝腎の玉能姫……オットドッコイ魂までが脱け出して了つた。オイ魂抜けの國依別、さうぞ早く歸つて呉れ。此李助もそなたの靈が憑つて此通り四つ足になつて了つた。其四つ足もまだ俯向いて居れば歩く事も出来るが、この通

り腹と背中を換へて了つては、何程跪いて見ても空を掻くばかり、疊に平張附いて動きが取れない。ア、國依別、たま／＼訪ねて来て、四つ足のお土産は眞平御免だ。三五教の宣傳使がやつて来るミ、手足を蹴いても、如何しても、動きの取れないこゝになつて了ふ。馬に灸て貧窮だ。狐に灸て困窮だ。其方は牛に灸て何ぞモウギウな事がないかと思つて来たのであらうが、最早灸も茲まで据ゑられては、艾もあるまい。モグサ／＼致さずトツトご歸つたがよからう』

『李助さま、火の付いた様な火急な言葉、あなたは李助さまではなくて、ヤイトをすゑる艾助さまになつて了ひましたなア。これは／＼眞にアツイ御志……否御教訓、ごつさり此四つ足の守護神もヤイトを据ゑられました。それなら四つ足は唯今限り歸ります。あなたもさうぞ元の李阿彌……オットドッコイ李助さまに歸つて下さい』

「ハイ有難う。それなら改めて國依別の宣傳使様、三五教の李助改めて對面仕らう。今迄は四つ足同志の掛合で御座つた。アツハ、、、」

と笑ひながら起き直り、庭の泉に手洗ひ、口を漱ぎ、禮装を着し、

「サア、國依別様、神前に拜禮致しませう」

と促しながら、拍手再拜、天津祝詞を奏上し始めた。國依別も李助の背後に端坐し、恭しく祝詞を奏上し終つた。

李助「國依別様、あなたは是れから何處へお出でになる心組ですか」

國依別「ハイ私の今迄の教は、實を申せば貴方の御宅に参り、一つお尋ねをせなくてはならない事があつたものですから、ワザ／＼やつて來たのですが、モウ申しますまい。これでは貴方の深き御精神も了解致しましたから……」

「アツハ、、、若彦一件でお出になつたのですな。若彦は今紀州に居りますか」

「ハイ、紀州の熊野の瀧で大變に荒行を致して居る事を聞きました。それで私は熊野の瀧へ参つた所、若彦は唯一言も申さず、無言の行を致して居る。手真似で尋ねても文字を地に書いて糺して見ても、何の答も致さず、石佛同様、取り付く島もなく、鷹鳥山に於て何か感じた事があるのだらう、其峰續きに御住ひ遊ばす貴方にお尋ねすれば、様子は分らうか。存じまして参りました。併し唯一言……李助さま有難う……若彦の言つた言葉幽に聞えたので、何もかも様子を御存じだらう。あの喧しやの若彦が、あの通り神妙になつて了つたのは、貴方の感化に依るのだと信じます。過去を繰返すは御神慮に反するでせうが、御差支なくば少しなりと御漏らし下さらば安心致します」

「若彦は鷹鳥山に立籠り、悪魔に憑依され、四つ足になつて門口まで参りました。私は



「モウ一つ修行をして来い、四つ足に用はない……」と云つて、杓に水を汲んで犬の様にぶつかけてやつたら、尾を掉つて駆け出したきりですよ。ヤツバリ若彦は人間らしい立つて歩いて居ましたかなア。イヤもう四つ足の容物ばかりで困つて了ひますワイ。アツハ、、、、、」

「さうするご私もチヨボく〜ですな」

「チヨボく〜なら結構だが、愚圖々々するご、コンマ以下のチヨボく〜に落ちて了ふから氣を附けねばなりませんまい。お前さまも折角今、宣傳使に始めてなつたのだから、さうぞチヨボく〜にならぬ様に願ひますよ。貴方がさうなるご、私までも感染しては、最前のやうに二進も三進も行かぬ苦境に陥り、キウ窮言はねばなりませんからな、アツハ、、、、」

「アツハ、、、、」

と笑ひ合ふ。門口へ又もや婆の聲、

「生田の森の李助さまのお宅は此處で御座いますか。チヨット開けて下され」

李助「國さま、又もやチヨボく〜がやつて来たやうです。お前さま一つ私に代つて應對を下さい。私は奥へ行つて少しく神様に承はらねばならぬ事が御座いますから」

と云ひ棄て、慌しく姿を隠した。國依別はツミ立ち、門口の戸をガラリと引開け、

「此處は太元教の御本山だ。何處の四つ足か知らぬが、トットと歸つて呉れ」

「何ッ、李助が太元教を樹てたごは、噂に聞いたが、ヤハリ事實だなア。なぜ左様な二心をお出しなさるか」

國依別は黄昏を幸ひ、ワザと李助の聲色を使つて居る。

「わしは鷹鳥姫だが、お前さまに一つ御禮を申さねばならぬ事もあり、御意見をせなくてはならぬ事があるからお訪ねしたのだ」

「何ぞか彼こか口實を設けて、三五教の宣傳使や信者が、金を貸せの、履物を貸せ、飯を食はせ、茶を飲ませ、小遣錢を渡せよ、まるで雲助の様な事を吐し、小便、糞を垂れながして歸る奴ばかりだから、此李助も愛想をつかし、心は三五教でも表は太元教に標榜して居るのだ。最早神の恵に浴し、神徳充實した李助には意見は御無用だ。掛り合つて居れば大切なタイムまでも盗まれて了ふ。番茶一杯飲まれてもそれ丈缺損がゆく。身代限り、家資分散の憂目に遭はねばならぬから、一足なりこも這入つて呉れな。お前に禮を言はれる道理はない。トットと早く歸つたが宜からう」

「何ぞ云つても、そんな事を聞く以上は、ますます動く事は出来ぬ。コレ李助さま、心機

一轉もあまりぢやないか」

「オイ、其心機一轉だ。暫くの間現はれて消える蟹氣樓、名あつて實なき鷹鳥姫の宣傳使それなら這入る丈は許してやらう。其代り番茶一杯飲ます事もせぬ。何程無料で湧いた水でも、飲ましちやそれ丈減るのだから、其覺悟で這入つたが宜からう」

「大變貴方は各坊になつたものだなア。執着心の大變に甚い方だ。御免なさい」  
「大變貴方は各坊になつたものだなア。執着心の大變に甚い方だ。御免なさい」  
ミ簀笠を脱ぎ棄て、ツカ／＼ミ座敷にあがる。國依別は又もや煙草盆を前に据ゑ、李助氣取りになつて坐り込んだ。

鷹鳥姫「コレ李助さま、お前さまは俄に小さい事を仰有るご思へば、體まで小さくなつたぢやないか」

國依別はゴロンミ仰向になり、尻を鷹鳥姫の方に向け、手足をヌツミ天井の方に伸ばして見

せ、  
「金剛不壞の如意寶珠の玉や紫の玉が喉から出て了つたものだから、此通り瘡せて人間が小さくなり、元の奎助ではなうて奎阿彌。神徳も何もなくなつて了ひ、鷹鳥山で己むを得ず若彦、玉能姫を召し連れ、バラモン教の蜈蚣姫がてつきり隠して居るのに相違ないから、何さかして取返さねば聖地の役員信徒に對し合はす顔がないさ、執着心に驅られ言依別の教主の篤き心を無にして行つて居つた所、俄に山の頂に黄金の像現はれ、身の丈五丈六尺七寸、てつきり彌勒様の御出現、鷹鳥姫の信心の力に依りて、愈五六七神政の太柱を握つた。誠の靈地は四尾山麓ではない、鷹鳥山にきはまつたりさ、鼻の鷹鳥姫が得意顔に雀躍りしながら、チヨツミ薄氣味悪さうに近付き見れば、黄金像は高姫の素首をグツミ鷲掴み、猫でも放る様にブリン／＼さ、鷹鳥山の教の庭にドスンミ落下し、人事不省さな

り、ピリ／＼／＼さ蛙をぶつ／＼けた様になつて了ひ、其處へ此奎助がやつて往つて、生命丈は助けてやつた。其爲に此奎助は……コレ此通り足が上を向き背中が下を向いて、サツバリ自由の利かぬ四つ足になつて了つたのだ。併し乍ら此奎助は信神堅固の勇士……斯んな事になる筈はない。鷹鳥姫の副守護神が憑依したのだから、さうぞ早う、こんな……土産はスツ込めて下さい。なア鷹鳥姫さま、お前も却々執着心が酷いさ見える。同じ四つ足でも下向いて歩けるものならまだしもだが、斯うなつては天地顛倒、背中に腹を換へられて、さうして此世が渡られうか。……アツハ、……。オイ笑ふ所か、高姫の守護神此國……オットドッコイ神の國に出て来て、神の教を建ててゐるなんて、あんまり精神が顛倒して居るではないか。元の奎阿彌の奎助の真心に立返り、早く副守護神を連れて歸つて呉れ。奎助誠に迷惑だ。國、クニ、苦になつて仕方がない。依りにヨツて、別のわからぬ副

守護神を連れて来るものだから、玉能姫さまも、初稚姫さまも、チャンミ御存じ、ごつかへ蒙塵遊ばしたぞ。李助の本守護神も愛想を盡かして隠れて了つたぞ。ウン／＼／＼」

「コレ／＼李助さま、お前さまは何をした情ない事になつたのだい。結構な三五教を見限つて太元教なんて、そんな謀叛を起すものだから、天罰で四つ足になつて了ひ肩身が狭う小さくなつたのだよ。それだから油断は大敵、改心なされ云ふのだ。何程大持てにモテる積りでも、大モテン教だ。早く改心なされ、神様は人間が子を思ふこと同じ事、片輪の子や悪人程可愛がらつしやるのだから、わしも斯んな悲惨な態を見て、此儘歸る譯にも行かぬ。サアこれから鎮魂をして誠の教を聞かしてあげよう。エー／＼困つた事が出来た。此高姫の守護神が憑つたのだなごこ、よう言へたものだ。悪神云ふ者は、ごこ／＼までも抜目のない奴だ。到頭守護神の悪の性來を現はしよつたか。アア李助さまの肉体が可哀

相だ。オイ四つ足、李助さまの肉体を残してトットミ魔谷ヶ岳へ歸つてお呉れ。愚圖々々吐かすこ、日の出神の生宮が承知を致さぬぞや」

「此李助は最早お前さまの副守になつて了つた。お前さまは何時も口からものを言はず、ものを尻で聞いたり人の言葉尻を取り、尻でも言ふから、屁理窟ばつかりだ。鼻持ならぬ匂がする。何程三五教でも尻の締りが無ければヤツバリ穴有り教ぢや。終局には氣張り糞を放つて、此通り四つ足に還元して了ふ。早く李助の肉体から退かぬかいなア。李助は大變な御迷惑様だ。アツハ、、、、」

「自ら可笑しさを耐へ、忍び笑ひに笑ひ、體中に波を打たせて居る。

「なんだ。低い所から聲が出ると思へば、暗がりでも分らなかつたが、お前さま失禮な寝て話をする云ふ事があるものか、チト失敬ぢやないか」

「靈界物語でさへも、寢て足を上げたり、下したりして言ふぢやないか。お前さま位な四つ足に話すのは寢こつて結構だよ」

「利頭變性女子の四つ足の守護神が現はれましたなア。早く改心をなさらぬと、頭を下にし足を上にして、ノタクラねばならぬ事が出来致すぞよと、大神様のお筆にチャンと誠めてあります。鼻を撮まれても分らぬ程身魂が曇つて居るものだから、お前さまは天と地と間違へて居るのではなからうか。さうやら足が天井の方を向いて居るぢやないか」

國依別は、

「アア、悪性な守護神を連れて来て私に憑すものだから、段々足が上へあがり頭が下になつて了ひ、手で歩かねばならぬ様になつて来たぞよ」

「云ひながら逆立になり、兩の手で座敷を歩いて見せた。七手許り歩いた途端に、體の中心を失つて、高姫の頭の上へドスンと倒れた。

「コレ／＼李助さま、妾にはそんな守護神は居りませぬぞえ。日の出神様に、何時までもそんな巫山戯た態をなさるゝ承知なさらぬぞ。あゝモウ駄目だな。初稚姫さまも玉能姫さまも逃げて行かつしやる筈だワイ。わしも鷹鳥山を斷念し、此處迄來るは来たものゝ、こんな悲惨な暮を目撃しては、歸りもならず、居る事も出来ず、困つた事だ。ドレこれから神様に御願して助けてやつて貰はう。仕方がない」

國依別は、

「不言實行だよ。高姫さま」

「ミからかふ所へ、手燭を左の手に持ち、ノソリ／＼ミやつて来た眞正の李助、

「ヤアお前は鷹鳥姫に能く似た化物だなア。此處にも一人、お前の分靈が倒れて居る。ヤ

アもう此頃は澤山の狐が人間の皮を被つて、本助を誤魔化しに出て來るので油断も隙もあつたものでない」

「ヤアお前さまは本當の本助さま。さうして御座つた」

「何うしても御座らぬ。最前から闇に紛れて、四つ足同志の珍妙な藝當を拜見致して居つたのだ。何でもタカミカカ鷹とか、クモミカ國ミカ云ふ怪体な代物が、斷りもなく本助の身魂や住家を蹂躪し、エライ曲藝を演じて居つた。まるで此化物は鷹鳥山の鷹鳥姫に似た様な脱線振りを、遺憾なく發揮しよるワイ。アツハ、、、」

國依別は、

「ワツハ、、、オツホ、、、」

ミ笑ひながらムツクこ起き、ワザミカンテラの前に顔を突き出し、鷹鳥姫に俺の首實驗せよミ

言はぬ許りにさらけ出した。

「何ぢや。お前は國依別の理窟言ひの宣傳使ぢやないか。みつこもない、四つ足の眞似をしたり……チツト慎みなさい。モシ／＼本助さま、これでも分りませうがなア。サツバリ正体が現はれて、御覽の通り本當に悲惨なもので御座いますワイ。こんな精神病者を、お前さまもお預りなさつて、大抵のこつちや御座いますまい」

本助「今の今迄何こもなかつたのですが、お前さまが持つて來た……否お前さまの執着ミか名のついた副守護神が憑つたのですよ。ア、さうやら、私も變になつて來た。體中にウザ／＼ミ毛が生える様な氣分が致しますワイ」

國依別「本助さま、國もさうやら茶色の毛が生え出して來ました。風邪を引いたのか、俄に腹の中でコン／＼ミ咳をして居ます。今晚ミ云ふ今晚は實に不思議な宵ですな」

「なんぞお前さま達は、これ程神界が御多忙なのに、氣樂な洒落をなさつて日を送りなさるのは、チツト了簡が違やませぬか。利己主義の守護神が極端に發動して居りますなア。妾の守護神が憑依したなんて、ヘンよう仰有りますツイ。これから日の出神様が御神力を現はして見せませうか。そこらが眩うて目もあけて居れぬ様になりますぜ」

李助は笑ひながら、

「何を言つても、私は折角呑み込んだ二つの玉を、李助の娘のお初に叩き出されて了つたものだから、サツパリ腰は抜け、鷹鳥山もサツパリ駄目になり、これから何處へ迂路ついで行かうか。若彦は姿を隠すなり、せめて李助さま宅へでも往つて……此間はエライ御世話になりました……ご御禮をきつかけに、何にかよい智慧を借りたいものぢや、ノコノコやつて来て見れば李助さまは御座らつしやらず、理窟言ひの控廻し上手の國依別が

人を嘲弄しやがる。エー此上は如何したら宜からうかなア。アンノ……斯う云ふ聲は李助の言葉では御座らぬ。鷹鳥姫の薄志弱行名名の付いた守護神が、私にこんな事を囁かすのだ。早く此守護神を放り出し、自分も此館を放り出て、さここへお道の爲に行つて貰ひたいものだ。李助も大變に迷惑だ。アツハ、ハ、ハ、」

高姫は暫く腕を組み、首を頻りに振り、思案に沈む。國依別は、

「あの高姫さまの心配さうな顔。さうしたら元の通りになるだらう。……オウ分つた、あの玉の在處を知らしてやりさへすれば、元の日の出神の生宮で威張れるだらう、さうすりやキット全快するに定つて居る。ヤツバリ言ふまいかなア。又吞まれ、今迄の様に噪がれるに困る、當る可らざる萬丈の氣焔を吐かれるに、側へも寄りつけないやうになるから……」

「何、寶珠の行方を、お前知つて居るのかい」

「知つて居らいでかい、國さまだもの」

「そんならお前が妾を困らさうと思つて隠したのだなア。油断のならぬ男だ。サア李助さま、蛙は口からわれミ吾手に白状しました。縮木に懸けても言はしめて、玉の在處を探して見ませうかい」

李助「サア如何だかなア。大方蒟蒻玉か何ぞミ間違つて居るのだらう。それが違つたら瓢六玉か、狸の罌玉位なものだ。アツハ、、、」

國依別「ナアニ李助さま、本當に玉の在處を發見したのですよ。これから私がコツソリミ其玉を拾ひあげ、高姫さまぢやないが、腹へ呑み込んで、一つ大日の出神ミなる心算だ……オット失敗つた。高姫さまの居る所と言ふぢやなかつたに……秘密が暴露したワイ、ア

ハ、、、」

「神政成就の御寶、一日も早く現はして御用に立てねばなりませんまい。三五教は日に／＼衰へて行くぢやありませんか」

「ヤツバリ國の夢やつたかいな……イヤ／＼夢ではない、現實だ。併し高姫さまの前では夢にしミかうかい。鷹鳥姫が忽ち玉取姫に早變りするミ、折角發見した私の功績が無くなる。言依別の神様に御褒めの言葉を戴き、それから三五教の總務になつて、日の出神の生宮を臆で使ふミ云ふ段取だ。高姫さま、お氣の毒ながら時世時節ミ諦めて下さい。あゝこんな愉快な事があらうか」

「本當にあるのなら、二つの玉を、一つお前に上げるから、一つは妾に手柄を譲つて下さい。別に呑み込んで了ふのぢやないから……」



「何でも呑み込みのよいお前さまだから劍呑なものだ。それなら一つ相談をしよう、紫の玉はお前さまが預るこして、私は金剛不壞の如意寶珠を預かる事にしよう。それさへ決定れば、何時でも知らしてあげる」

「そりやチット虫がよすぎる。金剛不壞の如意寶珠は、永らく妾の腹の中に鎮座しました寶玉だ。謂はば妾の生御魂も同然だ。お前さまは紫の玉で辛抱なさい」

「滅相な、鷹依姫がアルプス教の御本尊として居た位な紫の玉は、如意寶珠に比べては餘程劣つて居る。身魂相應だから、お前さまが紫の玉だ。私は何云つても如意寶珠を取るのだから、さう覺悟なさい」

「エー譯の分らぬ男だなア。モウ斯うなる以上は何云つても承知せぬ。奴盗人奴が、サア引摺つて往つてでも在處を白状させる」

「世界見え透く日の出神さまの生宮が、私の様な人間を連れて行かねば、玉の在處が知れぬこは、實に氣の毒なものだなア」

「妾の悪口を言ふのなら辛抱もするが、畏れ多い、日の出神様の悪口まで言ひよつたなアサアもう了簡ならぬ」

こいきなり胸倉をグツミ取つて締めつける。國依別は、

「何ッ、猪口才な高姫の奴」

こ又胸倉を取り、兩方から睨み合つて、眞赤な顔を膨らして居る。李助は、

「コレ高姫さま、國依別さま、御鎮まりなさい。同じ三五教の寶、誰が手に入れても同じ事ぢやないか」

高姫「イエ、斯んな奴に如意寶珠の玉を弄らさうものなら、それこそ穢れて了ひます。如何し

ても斯うしても、一步譲つて紫の玉だけは發見した褒美にしてなぶらしてやるが、假令天が地になり地が天になつても、如意寶珠ばかりは、こんな奴に持たして堪らうか……」  
國依別「ナアニ發見主は俺だ。先取權があるのだから、グヅく云ふに、二つながら俺が預るのだ」

「何ッ、玉盗人の分際にして廣言を吐くか」

高姫は組んづ組まれつ、座敷中をのたうち廻り、終局には金切聲を張上げて、汗みぎろになつて大活動を始めて居る。李助は、

「コラく國依別さま、お前本當に其玉の在處を知つて居るのか」

「ナアニ發見したら……云ふ話です。夢にでも見たら俺が見つけたのぢやから、如意寶珠の玉を俺が預るに云つたばかりです。まだ皆目在處は分らぬのです、アツハ、、、あ

まり一生懸命で嘘が眞實になつて了つた。アツハ、、、」

「何ッ、お前嘘を云つたのか。なアんの事だいな。あーア、要らぬ苦勞をやらされて了つた。そこらが茨掻だらけたがな」

李助「アツハ、、、又執着に云ふ魔が憑いて、面白い演藝を無料觀覽させて呉れたものだな  
アツハ、、、」

小腹を抱へて笑ふ。

(大正一一・五・二八 舊五・二 松村眞澄録)

## 第八章 布引の瀧（七一〇）

初稚姫、玉能姫は靈夢に感じ、李助の庵を立ち出で、青葉も薫る初夏の山路を再度山の山頂目蒐けて登り行く。涼々たる瀧の音が間近く聞えて來た。

玉能姫「初稚姫様、あの音は布引の瀧に近くなつたのでせう。一つ御禊をしてお夢にお示しの

山頂に参り、言依別の教主より玉を預かつて歸りませうか」

初稚姫「小さな聲で仰有つて下さい。此邊は曲神の惡靈が充滿して居りますから、神界の秘密を探り、又もや妨害を加へられては大變ですから」

「ア、さうでしたね、兎も角瀧の音を目當てに、霧を分けて参りませう」  
ミ夕霧籠むる谷間を、玉能姫は初稚姫の手を取り勞はりつゝ、谷深く進み入る。

見上ぐる許りの瀑布の傍、飛び散る狭霧の玉は雨の如く降りしきり、周囲の樹木は何れも誕生の釋迦のやうになつて居る。二人は佇み、瀧の雄大さを褒めて居る。霧押し分けて現はれ出でたる十數人の荒男、

甲「オイ、カナンボール、此間は山櫻の盛りの時だつたがなア、鷹鳥山の清泉まで往つた時出て來よつたお化の女、玉能姫が現はれたぞ。其時には同じ姿が三人連れさなり俺等を偉い目に遣はしよつたが、今度は手を替へて二人さなり、一人はあんなチツボケな小娘に化けて出よつた。さアこれから一方口の此谷間、逃げよう云つたつて逃げられない屈強の場所、一つ彼奴を取捉へて魔谷ヶ岳に連れ歸り、蜈蚣姫さまの御褒美に預からうぢやないか」

スマート「貴様の云ふ事は實に名案だ。愚圖々々して居るこ、又もや三五教の奴が出て來ては大變

だ。善は急げだ。早く片付けて仕舞はう。何でも此邊に鷹依姫が持つて居た紫の玉が隠してあるに云ふ事だから、彼奴を捉へて詮議すれば明白になるであらう。序に三五教の本山ではモウ二つの玉が紛失したに云うて騒いで居るが、大方玉能姫が何々しやがつて、此邊に置いて居るのに違ひないに云ふ噂だ。さア今度こそぬか、つてはならないぞ。オイ皆の奴、其邊にすつこんで逃げ道を警戒し、萬一も三五教の奴が出て來よつたら合圖の柴館を吹くのだぞ」

鐵公「ハイ、承知致しました。皆の奴を監督して違算なきやうに鐵條網となつて、如何なる強敵も、一歩たりとも侵入しないやうに致します。御安心下さい」

スマート「オイ、それなる女、汝は鷹鳥山の魔性の女、玉吞姫であらうがな。三つの玉を何處へ呑

んだか、呑隠したか。キリくちやつに白狀致し、此方に渡せばよし、渡さぬなきに吐すが最後、汝が素首取捉まへて魔谷ヶ岳の靈場へ連れ歸り、水責め火責めはまだ愚か、劍の責害に遇はしてでも白狀させる。ならう事なら俺達も神に仕ふる身分だ。苦しめたくはない、早く白狀致すが汝の得策だらう。手具脛引いて待つて居た。此處へ來たのは汝に取つて最早百年目、因果を定めて返答せい」

玉能姫「エ、誰人かと思へばバラモン教の蜈蚣姫が部下のスマートボールさまにカナンポールの大將様、私が如何に玉能姫ぢやに云つて、玉を持つて居るは些に可笑しいぢやありませんか。それは貴方のお考へ違ひでせう」

「考へ違ひもあつたものかい。三五教の裏返り者。貴様は三つの玉を持ち出して隠し場所に困り、狼狽して居やがるに云ふ事は、聖地へ入り込ましてある天州の報告によつて明かな

る處だ。三五教でさへも皆貴様の所作だ。目星をつけ、その在處を、四方八方に宣傳使が探ね廻つて居る。貴様は三五教の宣傳使にぶつつかるや否や、笠の藁がなくなる代物だ。それよりも綺麗薩張りご白狀致し、パラモン教に其玉を献上致し、蜈蚣姫様の片腕ごなり俺ご共に神業に奉仕する氣はないか」

玉能姫は微笑しながら、

「これは偉い迷惑、三五教の人達までが、さう私を疑つて居るのですか。そりや嘘でせう」

初稚姫は小聲で、

「嘘です、玉能姫さま、眞實にしちやいけませんよ。三五教には一人にして貴女を疑つて居るものはありませぬ、安心なさいませ。あんな事を云つて氣を引くのですからな」

玉能姫

「ハ、アさうでせう。油断のならぬ奴ですな」

スマート「こりや、コメツチヨ、要らぬ智慧をつけやがらない。何だッ、チンピラの辯に、子供は子供らしくせい。これ、玉能姫、何云つても調べ抜いてあるのだから、このスマーボールの云ふ事に間違はあるまい。玉がないならな、玉吞姫でも連れて歸らねばならない。さア返答はさうだ。今度は化けよう云つたつて化けさせぬぞ」

「オホ、、、貴方等は徹底した没分漢ですな。玉で見當違ひですよ」

「見當の取れぬ仕組云ふぢやないか、その見當を取るものがパラモン教だ。最早矢は弦を離れたら同然、てつきり俺の的は外れつこはない。一度放つた矢は行く處まで行かねば落ちつかないぞ。何云つても貴様はパラモン教の恨みの的、否目的物だ。さア、ゴテ、云はずに、俺達の申す通りに包み隠さず云つて仕舞へ。それが却てお前の出世の因

「オホ、、、、、私は別に出世なんかしたくはありませぬ。そんな執着心は疾うの昔に神様にお供へして仕舞ひました。病氣も、罪も、汚れも、一切残らず三五教の大神様に奉納した私、この瀧水のやうに綺麗靡張り、今では水の御魂の水晶玉。お生憎様、なんにも御座いませぬよ」

「何ッ、水晶だこ、それさへあれば三つの玉よりも優つて居る。さア其玉此方へ渡せ」

「オホ、、、、何處迄も譯の分らぬ玉抜け男だ事。こんなお方にお相手して居つては此方がたまらぬ。御免なさいませ」

「先へ進まうとする。」

「コレく女、かう見えてもバラモン教の蜈蚣姫が左守、右守の神様だ。玉能姫は三五教

で、何れだけ地位をもつて居るか知らないが、到底俺達に比べものにはなるまい。此つこは禮儀を辨へて居るだらう、なぜ解決をつけてゆかないか」

玉能姫

「オホ、、、、色のお黒い蜈蚣姫さまの御眷屬だけあつてお二人様、お色の黒い事、黒いにかけては天下無類の豪傑でせう。私は根つから、色の黒いのは虫が好きませぬ」

「何だッ、善言美詞を使ふこ云ふ三五教の信者が、人の顔の品評までやるこ云ふ事があるものか。他の顔が黒いなんて、女の分際で男を嘲弄致すのか」

「ホ、、、、貴方は色の黒いのが御自慢でせう。鳥は黒いのが重寶、白鷺は白いのが重寶でせう。蜈蚣姫のお氣に入る貴方等だから黒いこいつたのは、畢竟私が尊敬を拂つたのです。悪く取つて貰つちや困りなすなア。あのまアお二人様とも揃ひも揃うてお黒い事何方向いて御座るのか、近よつて見なくては分りませぬ」

カチン 『オイ、スマート、なんぼ尊敬を拂ふに云つたつて、色が黒いに云はれるのは、根つから有難うないぢやないか』

スマート 『何、此奴ア海千、川千、山千の化物だから、尊敬どころか、體のよい辭令を使つて俺達を極端に罵倒して居るのだよ。サアもう斯うなつては俺も承知がならぬ。オイ皆の奴、出て來い。此奴をふん縛つて布引の瀧へ投り込むのだ』

『オーイ』

ミ答へて四邊の樹の茂みより十數人、バラ／＼ミ二人の周圍に駈け集まつた。

玉能姫 『コレ／＼初稚姫さま、確かりして居て下さいや。是から一つ私が奮闘して、皆の奴に一泡吹かせて改心をさせて見ませう。言靈戦も結構だが、彼様な心の盲聾には言靈の効能は覺束ない。先づ第一着手ミして女の細腕が續く限り、直接行動を開始致しませう』

ミ懷中よりの褌を取り出し、十文字にあやざり、裾を高くからげ、大地に四股を踏み、兩手を擴げ、

『サア來い、來れ、木葉武者共。三五教の玉能姫が武勇の試し時』

ミ兩手に唾しながら身構へた。六才の初稚姫も振鉢巻を凍ミ締め、褌を十文字にあやざり、袴の股立締め上げ、これ亦兩手を擴げ唾しながら、

『やア／＼、バラモン教を奉ずる小童共、初稚姫が幼の腕力を試すは此時、さア來い、來れ』

ミ雄健びする其凛々しさ。

スマート 『アハ、ハ、ハ、些つミ洒落てけつかる。小さい態をしてなんだ。オイ皆の奴、こんな女二人位に大勢の男がか、つたに云はれては末代の耻だ。俺一人で澤山だ。貴様等はこの活劇

を觀覽して居れ。サア女、この腕を見よ。中まで鐵によ

玉能姫「腕ばかりか、體一面黒い、鐵の様な眞黒黒助。水晶玉の玉能姫が、今汝の垢を落してやらう。サア來い、勝負だ」

「何ッ猪口才な、其大言後に致せ」

頑丈な腕をぶん／＼云はせながら玉能姫に打つてかゝる。玉能姫はヒラリミ體をかはしスマートが足を掬つた途端、瀧壺へドブンミ眞逆様。こりや大變だミカナンは忽ち捻鉢巻し、又もや鐵拳を振うて打ちかゝる。初稚姫は、

「ホ、、、ホ、、、」

ミ體をしやくつて笑うて居る。玉能姫は、

「エ、面倒な。汝も共に瀧壺へ水葬だ。覺悟致せ」

ミ飛びつき來るカナンボールの首筋に手を掛くるや否や、エイツミ一聲、中空を二三遍廻轉し瀧壺へ又ちやザンブミ落ち込んだ。十餘の荒男は二八の危急を見て、死物狂ひに前後左右より打ち掛かる。玉能姫は右から來る奴は左に投げ、左から來る奴は右へ投げ、前から來る奴は後へ放かし、後から抱きつき喰ひつく奴は身を縮めて前方の谷底へステンドウミ放り投げた。初稚姫は飛鳥の如く飛び廻り、

「ホ、、、ホ、、、」

ミ笑ひ専門の活動をやつて居る。

此時數十人の足音が聞えて來た。近より見れば霧の中より現はれた眞黒黒助の蜈蚣姫、

「ヤア／＼、汝は三五教の玉能姫なるか、よくも吾等が部下を惱ましよつたな。此蜈蚣姫が現はれた以上はもう叶ふまい。サア尋常に降伏致すか。この谷口は數十人の部下を以て



守らせあれば、汝が身は袋の鼠も同然、サア何うちや。往生致したか」

玉能姫「ホ、、噂に聞き及ぶ蜈蚣姫は汝の事なるか。聞きしに勝る黒い婆アさま、雪より

白い玉能姫が、此瀧壺に放り込んで洗濯してやらう。サア来い」

ミ手に唾きして身構へすれば、蜈蚣姫はカラ／＼ミ笑ひ、

「蜈蚣の斧を揮つて龍車に向ふが如き、危い汝の振舞ひ。大人颯りの骨颯り、神妙に降伏

致したが汝の爲であらう」

「誠一つを貫ぬく三五教の宣傳使、汝が一族の身魂を此瀧水にさらし、水晶魂に研いて呉

れむ。有難く感謝せよ」

ミ婆の皺苦茶碗を取らむミすれば、婆もいれ者、その手を引きはづし、玉能姫にウンミ一聲當身ヶ喰はせた。玉能姫は脆くも其場に倒れてしまつた。後に残つた初稚姫は又もや小さき兩手

を擴げ、

「ヤア、蜈蚣姫、吾は三五教の信者、汝が眷屬共を残らず瀧壺に放り込み、身魂の洗濯をしてやつて居るのに其御恩も知らず、玉能姫に當身を喰はすミは理不盡千萬、もう斯うなる上は初稚姫が了簡ならぬぞや。サア来い、蜈蚣姫」

ミ手に唾する。

「オホ、、玉能姫さへも此婆の手にかゝつて、一溜りもなく氣絶致したではないか、コメツテヨの分際にして武力絶倫なる蜈蚣姫に口答へ、否手向ひしようミは不埒千萬、道理が分らぬも程がある。ヤア無理もない、何を云うてもまだ子供だからな」

「満六才になつた初稚姫の細腕の力を喰つて見よ」

「何ッ、猪口才千萬な」

ミ武者振りつく。初稚姫は右へ左へ體を躲し、暫時が程は挑み戦ひしが、遂に蜈蚣姫の爲に組み敷かれ、今や息の根を絶たれむとする時しもあれ、瀧の上方より宣傳歌の聲が聞えて來た。蜈蚣姫は此聲に驚き、ハツミ瀧壺の上を見上ぐる機に手が緩んだ。初稚姫はその虚に乗じ、ムクツミ立ち上り、

「ヤア蜈蚣姫、もう此上は勘忍ならぬ。覺悟せい」

ミ小さき拳を固め、又もや打つてかゝる。瀧の上の二人の男、

「ヤイ瀧公。あれは確に初稚姫様ぢやないか」

瀧公「思はぬ御遭難、お助け申さねばなるまい。オイ谷丸、俺に續け」

ミ壁の如き岩に纏へる藤蔓、木の枝なきを力に、猿の如く下りて來た。谷丸は、

「ホー、貴女は初稚姫様」

初稚姫「ヤア谷丸、瀧公、よく來て下さつた。玉能姫さまは氣絶して居られます」

瀧公「何ッ、玉能姫さまが」

ミ兩人は玉能姫に向つて瀧水を含み、面部に吹きかける。

蜈蚣姫「エ、もう一息云ふ處へ怪體な奴がやつて來よつて、俺達の邪魔を致すのか、覺悟を

致せ」

ミ婆は谷丸に武者振りつく。谷丸は體を躲した途端に婆の足を凌へた。蜈蚣姫は傍の谷底へ筋斗うつて顛落し、狐鼠々々霧に紛れて逃げ出した。スマートボール、カナンボール其他の連中は、思ひ／＼濃霧を幸ひ四方に散亂してしまつた。

玉能姫は瀧公の介抱に初めて正氣づき、四邊をきよろ／＼見廻し、

「初稚姫様々々」

ご呼び立てる。初稚姫は傍近く寄り添ひ、

「玉能姫様、安心して下さい、此通り無事で居ります。蜈蚣姫以下の悪者共は残らず退散致しました。谷丸さまや瀧公さまが危急の場合に現はれて、私達の危難を救うて下さつたのですよ。これも全く神様の助け船、お喜びなさいませ」

玉能姫は此言葉にやつみ胸撫で下し、

「ア、初稚姫様、御無事で何よりでした。谷丸様、瀧公様、有難う、よう来て下さいましたなア」

嬉し涙に沈む。各瀧に身を清め、初稚姫の導師にて天津祝詞を奏上し終つて、二三町許り谷道を下り、稍平坦なる芝生の上に身を横たへ息を休めた。

玉能姫「不思議な所へ貴方等がお越し下さいまして、加勢をして頂き、何もお禮の申しやう

が御座いませぬ。さうしてお二人さま、何御用あつて、此處へお越しになつて居たのですか」

谷丸は、

「實は貴女だから申上げますが、言依別さまの御供をして再度山の山頂迄参り、教主さまは一生懸命に何事もお祈りをして居られます。何でも大變な神様の御用ださうです。ついで今の先教主様は俄に神懸りにお成り遊ばして「汝等兩人、吾に構はず布引の瀧へこれから参れ、御用がある」を仰せになりましたので、兩人は何事ならむと山を駆け下り、瀧の上より眺めて見れば今の有様、私の用を申すのは此事で御座いましたでせう」

「それは御苦勞で御座いました。吾々二人は神様のお夢に感じ、此お山の頂に大變な御用があるを承はり、生田の森の柰助さまの館を立ち出で、初稚姫様の手を曳いて瀧の麓

迄やつて來ました所、バラモン教の一味の者に取り圍まれ、既に危き所で御座いました。これに申すも神様の吾々への御試練でせう。いつもなら言靈をもつて言向け和すのですが、何だか今日に限つて腕を揮ひたくなつて参りました。實にお恥かしい事で御座います。瀧公は、

「イヤ、何事も神界の御都合でせう。此先幾多の悪者、續出するかも知れませぬ、千騎一騎の時に用ふる武術ですから、強ち罪にもなりませんまい」  
初稚姫は優し味のある聲にて、

「是より言依別の教主に面會し、神界經綸上必要なる寶玉をお預り致し、或地點に埋藏すべく吾等は神務を帯びて居るのです。寶を附狙ふ悪魔は數限りもなく居ますから、武術を應用するも已むを得ませぬ。きつと神様はお許し下さりませう。谷丸、瀧公兩人、吾等二

人を固く守り此山頂に案内致されよ」

と云つて神懸りは元に復した。谷丸、瀧公は二人の前後を警護しながら、山頂目蒐けて登り往く。

言依別命は山頂の麗しき巖の上に、十重二十重に包みたる三個の玉を安置し、一生懸命に祈願を凝らす最中であつた。谷丸は、

「教主さま、唯今歸りました。大變な事が出來致して居ました」

「それは御苦勞であつた。初稚姫様、玉能姫様は御無事であつたかな」

「ハイ、危機一髪の時兩人が参りましたので、先づ生命だけは助かりました、やがて瀧公がお守り申して登つて來ませう。私は一足先に御報告のために、途中から急いで歸りました」

「あゝそれは御苦勞であつたなア」

言依別命はニコ／＼嬉しさに笑つて居る。

「やつこいごつこい、うんごこしよ」

こ一歩々々に拍子を取り、急坂を登つて来た瀧公は、峰の尾上に立ち、

「サアお二人さま、もう樂です。つい其處に教主が居られます。何でも貴女に結構なものをお渡し遊ばすさうです。御神諭にも「何んな人が、何んな御用をするやら分らぬ」ミ示されて居ますが、肝腎の幹部のお歴々様には、素知らぬ顔をして、女や子供に御神徳、否肝腎な御用を御命じになるさうです。吾々は實に羨ましく御座います。併し乍ら聖地に於ては門掃き、草むしりばかりやらせられて居つた共々兩人が、肝腎の教主様の御微行の御供をさして頂いたのですから、實に有難いものですよ。神様は公平無私ですから、人間の

勝手に決めた階級なきに頓着遊ばさない。さうでなければ吾々も耐まりませぬからなア」  
 教主の前に一歩々々近寄つて来る。

言依別命「皆さま、よく来て下さいました。随分この山は嶮岨で御困りでしたらう」

玉能姫「イエ／＼、神様のお蔭で知らぬ中に登つて参りました。昨夜神様の靈夢に感じ、初稚姫様を伴ひ當山に参ります途中、布引の瀧に於てバラモン教の一派に包圍せられ、進退谷丸處へ、布引の瀑布のやうな清い瀧公さまを初め、谷丸さまがお越し下さいまして、一切の悶着も瀧水の如くさら／＼と落着致しました。何か神界の御用を妾達に仰せつけ下さいますのでせうか」

「貴女は靈夢に感じながら、直ぐさま山頂に登らず、體を清めようなどと思つて、わき道をなさつたものですから、一寸神様に誡められたのですよ。今後は何事も柔順になさいま

せ」

『右難う御座います』

初稚姫「教主様、御機嫌宜敷う御座います」

「小さき手を地に突いて挨拶する。言依別命も亦大地に手をつき叮嚀に應答し、終つて、

『初稚姫様、玉能姫様、貴方等は是から大望な御用を勤めて頂かねばなりません。それについて心は底迄見抜いた谷丸、瀧公の兩人をして御供をさせますれば、何卒極秘密にして勤め上げて下さい。金剛不壊の如意寶珠の玉と紫の玉を、瀬戸の海の一つ島に埋蔵する御用をお任せ致します。私が参るのは易い事ですが、餘り目立つては却つて秘密が破れますから、此處でお目にかつたのです』

玉能姫「エ、何ぞ仰有います。あの紛失した云ふお寶物が、これで御座いますか。錚々た

る立派な幹部の方々がおありなさるのに私のやうな女風情が、斯様な大切な御用を承はつては分に過ぎます。何卒幹部の方に仰せつけられますやうに』

『澤山の宣傳使は居りますが、餘り淺薄で執着心が深く、嫉妬心が盛んで功名心に驅られ、且つ口の軽い連中ばかりで、誠の御用を命ずるものは一人も御座いませぬ。私は此事について日夜憂慮して居りました處、錦の宮の大神様に、玉照彦様、玉照姫様がお伺ひの結果、教主の私をお招きになり「貴女等にこの御用をさせよ」この嚴格なる御命令で御座いました。是非共是は御辞退なされては御神慮に背きます。是非此御用にお仕へ下さいませ』

「ぢやい申して、餘り畏れ多いぢや御座いませぬか』

初稚姫「玉能姫様、教主様のお言葉の通り、謹んでお受けなさいませ。私も喜んで、御用を

承はりませう』

『左様ならば不來ながらお使ひ下さいませ』

『早速の御承知、大神様も嘸御満足に思召すで御座いませう。さア是より谷丸、瀧公の兩人は、お二方を保護し、二つの玉を埋藏すべく御供をして神島に渡つて呉れ』

谷、瀧兩人はハツミ頭を下げ、

谷丸『私等の如き卑しき者に、此御用仰せつけ下さいまして有難う存じます』

『今より谷丸に對し佐田彦三名を與へ、瀧公に對し波留彦三名を與ふ。是よりは佐田彦、波留彦となつて大切なる御神業に奉仕されよ』

二人は有難涙に暮れつゝ、

谷丸『大切な御用を仰せつけられた上、結構な御名迄賜はりまして、吾々身に取りて此上なき

光榮で御座います』

『お禮には及ばぬ、皆大神様の御命令だ。今日から佐田彦の宣傳使、波留彦の宣傳使に任命する』

二人は夢かみ許り打ち喜び、地上に頭を下げ歡喜の涙に暮れて居る。

言依別命『この玉は金剛不壞の如意寶珠、初稚姫さまにお預け申す。是は紫の玉、玉能姫さまにお預け申す。も一つ黄金の玉、これは言依別か或靈山に埋藏して置きます』

玉能姫『教主様は神島へはお渡りになりませぬか』

『三十餘万年の未來に於て、此寶玉光を發する時、迎へに参ります。それ迄は斷じて渡りませぬ。サア四人の方、此峰傳ひに明石の海邊を通り、高砂の浦より、竊かにお渡り下さい。これでお別れ致します』

言依別命は峰を傳ひ足早に姿を隠した。

此黄金の玉は高熊山の靈山に埋藏され、ミロク出現の世を待たれたのである。其時の證として三葉躑躅を植ゑて置いた。三個の寶玉世に出でて光り輝く其活動を、三つの御魂の出現も云ふのである。

(大正一一・五・二八 舊五・二 加藤明子録)

瑞 月

一筋や二筋繩で行かぬ奴を

三筋の糸でひき縛る猫

第十九章 山 と 海 (七一)

佐田彦は腰帶を解き、幾重にも包みたる玉函をクル／＼と兩端に包み、肩にふわりと引掛け得るやうに荷造りした。波留彦は驚いて、

「コリヤ佐田彦、大切な御神寶を、何だ、貴様の肌につけた穢苦き三尺帯に包む云ふことがあるか、玉の威徳を潰す云ふことを心得ぬか、さうして其の態は何だ。帯除け裸体になつて、みつこもないぞ」

佐田彦「お前の帯を縦に引裂いて、半分呉れなければ仕方がない。藤蔓でもちぎつて帯にしよ

う」  
「エー、そんなことして道中が出来るか、みつこもない。自分の帯は自分がして行け。神



玉の御威徳を瀆すぞよ』

『イヤ波留彦、さうでないよ。此山續きは随分バラモンの連中が徘徊してゐるから、貴重品を見せかけて狙はれてはならぬ。幾重にも包んだ寶玉、滅多に穢れる氣遣ひはない。斯うして往かねば劍呑だから』

『如何に劍呑だに云つて、そりや餘りぢやないか』

『萬劫末代に一度の大切な御用だ。二度目の岩戸開きの瑞祥を祝するため、言依別様が此再度山の山頂で、二度さない結構な御用を仰せつけられたのだ。失策つては大變だから、斯うして往くが安全だよ』

波留彦は、

『なんだか勿体ないやうな心持がするのだ。併し乍ら肝腎の寶を敵に奪られては一大事だ

から、そんならお前の言ふ通りに行かう。サア、俺の帯を半分やらう』

ミ縦に真中からバリ／＼ミ引裂いて佐田彦に渡した。佐田彦は、

『イヤ、有難う。これで確かに腹帯が締つて來た。併し乍ら玉能姫さま、初稚姫さま、貴女等はその綺麗な服装で御出になつては、悪漢に後をつけられては詮りませぬよ、何か工夫をなさいませ』

玉能姫 『ハイ、吾々二人は着物を裏向けに着て、氣違ひの眞似をして参りませう』

佐田彦 『ヤー、それは妙案だ。流石は玉能姫様だ。サア／＼、佐田彦が着替へさして上げませう』

ミ立ち上らむとするを玉能姫、初稚姫は首を左右に掉り、

玉能姫 『イエ／＼、滅相な、妾も玉能姫、自分のこゝは自分で處置をつけねばなりません』

云ひつゝ、クル／＼ミ帯を解き、裏向けに着物を着替へて了つた。

初稚姫も亦着物を脱がうとするを、玉能姫は少し首を傾け、

「一寸待つて下さい。氣違ひが二人もあつては却つて疑はれるかも知れませぬから、貴方は氣違ひの娘になつて下さい」

初稚姫「そんなら氣違ひのお母さま。サア、何處なつこ参りませう」

玉能姫「オイ佐田公、波留公、貴様は何處の奴だ。餘程好いヒヨットコ野郎だな」

佐田彦「これはしたり、玉能姫さま、姫御前のあられもない、何云ふ荒いこゝを仰有りますか」

「知らぬ知らぬ、アア、斯んなヒヨットコ野郎の莫迦者ミ道伴れになるかと思へば残念だ。氣が狂ひさうだ」

「玉能姫さま、今から氣違ひになつて貰つては波留彦も忝りませぬで」

「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ。大棍役者が玉を持つ、コリヤ／＼」

佐田彦「玉能姫さま、洒落もい、加減になさいませぬ。これから未だ澤山な道程、今から氣違ひの眞似して居つては忝りませぬで」

「なに、妾を氣違ひみな。エー残念だ。バラモン教に於て其の人あり聞えたる鬼熊別の妻、蜈蚣姫はわが事なるぞ。汝は三五教の腰拔宣傳使、この蜈蚣姫が尻でも喰へ。残念なか、口惜しいか。あの詮らぬさうな顔付ツイの。オホ、」

ミ臍を拘へて笑ひ倒ける。

佐田彦「ア、仕方がないなア、あんまり嬉しうて玉能姫さまは本當に逆上せて了つたのだらうかなア、波留公」

玉能姫「定めて逆上させたのであらう。逆上せ切つた蜈蚣姫の再來が、お前の頭をボカンミ波留彦だ」

ミ言ひながら波留彦の横面をピシヤ／＼ミ撲り、

「アハ、ハ、ハ、」

ミ腹を抱へて笑ひ倒ける。

波留彦「なんぼ女にはられて気分が好いミ言つても、キ印に撲られて怖るものか。さア行きませう、玉能姫さま、確かりなさいませ」

玉能姫「ホ、、、私は玉能姫ぢやないよ、狸姫だよ」

波留彦「エー、怪体の悪い、肝腎の御神業の最中にやくたいだなア。初稚姫さま、ちつミ確かり言つて聞かして下さいな。コリヤ本當に逆上させて居ますで」

初稚姫「お母さま、往きませう」

ミすがり付く其の手を取り放し、

「エー、お前迄が私を氣違ひミ思つて居るのかい。ア、穢らはしい。斯んな所には一時も居れない」

ミ二つの玉を包んだ帯を肩に引つかけ、山傳ひに雲を霞ミ走り行く。

初稚姫は負けず劣らず、玉能姫の後に隨ひ矢の如く走り行く。佐田彦、波留彦は遁げられては大變ミ一生懸命に後を追ふ。何時の間にか玉能姫、初稚姫の姿は見えなくなつた。

佐田彦「オイ、波留彦、大變なこミが起つたものぢやないか」

「貴様が確り握つて居らぬから、到頭狸が憑りやがつて持つて去んで了つたのだい。ア、もう仕方がない、神様に申譯がない。此絶壁から言ひ譯のために身を投げて死んで了はう」

かい』

『さうだと言つて、そんな事をすれば益々神界の罪だよ』

心配さうに悔んでゐる。

向ふの木の茂みから、

『オーイ、波留彦さま、佐田彦さま、此處だよ〜』

玉能姫は呼んでゐる。

波留彦『ヤア、在處が分つた。氣違ひ奴、あの禿げた山の横の小松の下に顔だけ出してゐる

表から行くこ又逃げられては大變だ。廻り道をしてそつこ捉まへようかい』

二人は山路を外し、木の茂みの中を蜘蛛の巢に引つかゝりながら、漸く玉能姫の間近に寄つた。

二一

玉能姫『あの二人の御方、よう来て下さりました。たま〜御用を仰せつけられながら、玉能姫

に玉を奪られて玉らぬだらう。さア〜初稚姫さま、あんなヒヨットコ野郎に構はず行き

ませうよ。ホ、ホ、』

嘲笑ひと共に掻き消す如く、又もや一目散に木の茂みを脱けて、何處へか姿を隠した。二人

は一生懸命に追ひかける。初稚姫の計らひで處々に小柴が折つて標がしてある。

佐田彦『ヤア、流石は初稚姫さまだ。子供に似合はぬ好い智慧が出たものだ。俺達に之を合圖

に來い云つて、小柴を所々折つて標をつけて置いて下さつた。オイ、之を探ねて走らう

ぢやないか、のう波留彦』

『オーさうだ』

二人は捻鉢巻しながら、小柴の折れを目標に追ひかけて行く。

鷹鳥ヶ岳の山麓の松林に七八人の男、胡床を掻き車座になつて、ひそく話に耽つてゐる。

甲 『オイ、大變に強い女もあればあるものぢやないか。俺達の兄分のスマートボールやカナンボールを苦もなく瀧壺へ投げ込み、剩つさへ俺達を谷底へ投げ込みやがつて、此通り痛い目に遇はせ、終局の果には蜈蚣姫の教主様まで、あんな目に遇はせよつた。彼奴は何でも偉い神様の再來かも知れないよ』

乙 『なアに、彼奴は玉能姫と云つて鷹鳥山の鷹鳥姫の婢女となり、清泉の水汲をやつて居つた奴だ。あの時は此方は女や子供と思つて油断をして居たから、あんな不覺を取つたのだ。何れ此邊へ迂路ついて来るかも知れない。なんでも彼奴を捉まへて三五教の賣の在處を白狀させ、バラモン教へ占領せねば、到底此自轉倒島に於ては俺達の教派は擴まらないなんごかして、まア一度彼奴の行方を探ね、目的を達したいものだ』

丙 『そんな危ないごこちは止しにせエ。生命あつての物種だ。蜈蚣姫さまでさへも彼奴の乾兒がやつて来て、谷底へ放り投げたやうな強力が隨いてゐるから、うつかり手出しは出来な  
いよ』

甲 『ちよろ臭いごこちを云ふな。計略を以て行く引張り込めば何でもない。俺が一つ智慧を貸してやらう』

丙 『さうするご云ふのだい』

甲 『貴様等二三人が俺と一緒に女に化けて鷹鳥山に乗り込み、三五教の求道者になつて誤魔化するのだ』

乙 『貴様の面では女に變装したつて到底駄目だよ。貴様が變装したら、それこそ鬼婆に見えて仕舞ふぞ』

甲 「鬼婆でも、鬼爺に見えなければ宜いちやないか。それで完全な女になつたのだら、善悪美醜は問ふところに非ず。俺は皺苦茶婆さまになつて入り込むから、貴様は皺苦茶爺になつて、杖でもついて腰を屈め、俺の後に踵いて来い」

乙 「いつその事、堂々男の求道者になつて行つたらさうだ」

丙 「そんな悪相な面をして行かうものなら、忽ち看破されて了ふぜ」  
斯く雑談に耽る折しも、向ふの方より一人の女、何か肩に引っかけ、髪を振り亂し、衣服を裏向けに着ながら、女に似合はず大股にトン／＼此方に向つて来る。

七歳ばかりの少女は、

「お母さま／＼」

と連呼しながら後追ひかけ来る。又もや續いて二人の荒男、

「オーイ／＼。待つた／＼」

と一生懸命に息を喘ませ進み来る。

甲 「アリヤ何だ、あた嫌らしい。髪を振り亂し着物を裏向けに着やがつて、禪に何だか石のやうなものを包んで走つて来るぢやないか。彼奴はてつきり氣違ひだよ。氣違ひに噛ぶりつかれでもしたら、まるで犬に喰はれたやうなものだ。オイ、皆の奴、すつこめ／＼」  
「よし来た」

と林の草の中に小さくなつて横たはる。その前を踏まむ許りに玉能姫、初稚姫は、

「キヤア／＼」

と金切聲を張り上げながら通つて行く。二人の男汗を垂らし、

「オーイ、氣違ひ待つた」

「又もや一生懸命西方指して進み行く。一同はやう／＼頭を上げ、

甲「ヤー何處の奴か知らぬが、女房が気が狂つた見えて、偉い勢で追ひかけて行きよつた。可愛相に、あんな娘がある仲で、女房に發狂されては怱つたものぢやない。併しなかく別嬪らしかつたぢやないか」

乙「さうだなア、可愛相なものだ。先へ行つたのはあれの爺だらう。後から行く奴はヒヨツミしたら下男かなんかだらうよ。何は兎もあれ、さえらい勢だつた。まるきり夜叉明王が荒れ狂うたやうな勢だ。マア／＼俺達は無事に御通過を願うて幸ひだつた」

「話してゐる。暫らくするに蜈蚣姫は、スマートボール、カナンボール其他拾數人の部下を引連れ、一生懸命に此場に駆け來り、五六人の姿を見て、

「オイ、お前は信州、播州、藝州の連中ぢやないか。なにして居る。今此處へ玉能姫が通

つた筈だがお前は知らぬか」

信州「最前から此處で一服して居ましたが、玉能姫のやうな奴は根つから通りませぬで。髪振り亂した氣違がキヤア／＼云つて通つたばかり、後から爺が可愛相に汗をアル／＼に掻いて追つかけて行きました」

「さうしても此處を通らにやならぬ筈だが、ハテ不思議だなア。それなら大方全助館へでも廻つたのだらう。一体何處へ行きよるのか。皆の奴、斯うしては居られない。再度山の山籠、生田の森に引返せ」

「慌しく呼ばはつた。スマートボールを先頭に全隊引率れて、東を指して一生懸命バラ／＼走り行く。

梢を渡る松風の音、刻々に烈しくなり、瀬戸の海の浪は山嶽の如く吼り狂うてゐる。玉能姫

初稚姫は漸々にして高砂の森に着いた。四邊に人なきを幸ひ、亂れ髪を掻き上げ、顔を立派に繕ひ、着物を脱ぎ替へ、元の玉能姫になつて了つた。息急き切つて走り來つた佐田彦、波留彦は此の姿を見て、

佐田彦「ヤー、玉能姫さま、気がつきましたか。大變心配でしたよ」

玉能姫「オホ、、、お約束通り上手に氣遣に化けたでせう。須磨の濱邊の難關を、あゝせな

くては通過が出来ませぬからなア」

佐田彦「イヤもう恐れ入りました。流石言依別命様が御見出し遊ばしただけあつて、佐田彦

如き凡夫の到底及ばぬ智慧を持つてゐなさるなア」

波留彦「本當に七尺の男子波留彦も畢丸を放かしたくなつて來ました。アハ、、、」

佐田彦「それにしても初稚姫さま、小さいのによく踵いてお出でなさいましたなア。何時もお

父さまに甘へて負はれ通したのに、今日は又さうしてそんな勢が出たのでせう」

「神様が私を引つ抱へて來て下さいました。あの大きな神様が御目に止まりませなんだ

か」

「さう聞くに何だか大きな影の様なものが、始終踵いて居たやうに思ひました」

「かげが見えましたか。それが神様の御かげですよ。オホ、、、」

「子供の癖によく洒落ますなア。シヤレ／＼恐れ入りましたもので御座るワイ」

「サア、これから高砂の濱邊へボツ／＼参りませう。幸ひに日も暮れました」

玉能姫は先に立つ。三人は欣々後に隨ひ、濱に立ち向ふ。

五月五日の月は西天に輝き、薄雲の布を或は被り或は脱ぎ、月光明滅、四人が秘密の神業を見え隠れに、窺ふものの如くであつた。鳴門嵐の暴風は遠慮會釋もなく海面を撫で、山嶽の如



き荒浪は立ち狂ひ、高砂の濱邊に押寄せ、驛馬の鬣を振つて嗜みついて居る。

佐田彦は、猿田彦氣取りで先に進み、船頭の家を叩き、

「モシ、船頭さま、これから家島へ往くのだから、船を出して下さいな。賃銀は幾何でも出しますから」

船頭は家の中より、

「何處の方か知らぬが、何を呆けてゐるのだ。レコード破りの荒浪に、如何して船が出せるものかい。こんな日に沖へ出ようものなら、生命がいくつあつても堪るものでない。マア、二三日風の風ぐ迄待つたらよからう」

佐田彦は小聲で、

「ハテ、困つたなア。吾々はさうしても家島へ渡らねばならないのだ。せめて中途の神島

までなつて送つて呉れないか」

「なんと言つても此の時化には船は出せないよ。桑名の龜藏ならばイザ知らず、俺達のような普通の船頭では、到底駄目だよ。こんな日に船を出す位なら、家もなんにも要つたものぢやない。そんな分らぬことを言はずに、二三日待つたがよからうに」

「さうしても出して呉れませぬか、仕方がない。それなら船を貸して下さいな」

「減相もないこと仰有るな。船でも貸さうものなら商賣道具を忽ち減茶々にされて了うて、女房や子の鼻の下が乾上つて了ふ。一つの船を儲へるにも百兩の金子が要るのだ。自家の身代は此の船一つだ。マア、そんなことは絶対に御断り申さうかい」

「未だ外に船頭衆はあらうな」

「此の濱邊には二三十人の船頭が居る。併し乍ら開關以來、この荒浪に船を出すやうな莫

迦者は一人も居りませぬワイ。今日は五月五日、菖蒲の節句、神様が神島から高砂へ御出で遊ばす日だから、尙々船は出せないのだ。假令浪はなくても今日一日は、此の海の渡海は出来ないのだ。暮六つから神様が高砂の森へ御越しになるのだ。モー今頃は神島を御出立遊ばして御座る時分だよ。何ぞしてそんな處へ行くのだい』

『俺は家島へ行くのだ。浪の都合で一丈御水を頂きに神島へ寄りたいと思ふのだよ』  
船頭は不思議な奴が出て来たものだ。と呟きながら表に立出で、

『ヤー、見れば若い御女中に娘さま。お前さま等も御一行かな』

玉能姫 『ハイ、左様で御座います。さうぞ船を御出し下さいませ』

船頭類に首を振り、

『ア、いかぬ、途方もないこと云ひなさるな。男でさへも行かれぬ處へ、妙齡の女が

渡るに云ふことは到底出来ない。平常の日でも女は絶対に乗せることは出来ませぬワイ』

初稚姫 『小父さま、そんなら其の船を賣つて御呉れぬか』

『賣つて呉れに云つたつて、中々安うはないぞ。百兩もかゝるのだから』

『それなら小父さま、二百兩上げるから、お前の船を賣つてお呉れ』

『百兩の船を二百兩に買つて貰へば、船が二隻新調出来るやうなものだ。それは誠に有難いが、併し乍らみすくお前さま達を海の藻屑になし、蟻の餌食にして丁ふのは何程慾な船頭でも忍びない。そんなことは言はずに諦めて歸つて下さい。男の方なら二三日したら船を出して上げよう』

『女は何うしていけないのですか』

『ア、いけない。理窟は知らぬが、昔から行つたことがない島だから』

佐田彦「船頭さま、そんなら時化が止んでから明日でも俺達が勝手に漕いで行くから、二百兩で賣つて下さい」

「百兩のものを二百兩に賣るご云ふことは、大變に慾張つたやうで氣が濟まぬが、併し船を賣つて了へば、次の船が出来るまで徒食をせねばならぬから、貯蓄の無い俺達、そんなら二百兩で賣りませう」

「有難い、そんなら手を拍ちます。一、二、三、」

船頭と佐田彦は顔を見合せ、手を拍つて了つた。

初稚姫は懷より山吹色の小判を取り出し、

「サア、小父さま、改めて受取つて下さい」

と突き出す。船頭は検めて見て、

「ヤ、有難う、左様なら。モウ一旦手を拍つたのだから、變換へは利きませぬよ」

と言ひ捨て、恐さうに家に飛び込み、中よりピシャンと戸を閉め、叮嚀に突張りをこうてるる波は益々猛り狂ふ。

「ア、此の船だ。サア皆さま、乗りませう。ちつと荒れた方が面白からう」

と佐田彦は先に飛び込んだ。三人も喜んで船中の人となつて了つた。

佐田彦「サア、波留彦、權を使つて下さい。俺は船頭だ。船を漕いで行く。随分高い浪だよ」  
とそろ／＼捻鉢巻になつて、船を操り始めた。

月は雲押し開きて利鎌のやうな光を投げ、四人の乗つた神島丸を照して居る。不思議や暴風は忽ち止まり、浪は見る／＼疊の如く風ぎ渡つた。二人は一生懸命に權を操りながら、沖に浮べる神島目標に漕ぎ出した。漸くにしてミロク岩の磯端に横付けになつた。

玉能姫「皆さま、御苦勞でした。貴下等二人は此處に待つて居て下さい」

佐田彦「イエ私も御供を致しませう。これ丈篠竹の茂つた山、大蛇が澤山に居る云ふことですから、保護のために吾々兩人が御供致しませう。言依別の教主様より「兩人の保護を頼む」云はれたのだから、もし御兩人様が大蛇にでも吞まれて了ふやうなことが出来したら、それこそ申譯がありません。是非御供を致します」

初稚姫「その大蛇に用があるのだから、来て下さるな。大蛇は男が行く大變に腹立て、怒るさうですから」

波留彦「大蛇でも矢張り女が好いのかなア。斯うなる男に生れたのも詮らぬものだ」

玉能姫「さア、初稚姫さま、参りませう。御兩人の御方、決して、後から来てはなりませんよ。用が済んだら呼びますから、それまで此處に待つてゐて下さい」

二人は頭を掻き乍ら、

佐田彦「エー仕方がない。役目が違ふのだから、そんなら神妙に待つて居ます。御用が済んだら呼んで下さい」

玉能姫「ハイ、承知しました。何うぞ機嫌よう待つて居て下さいませ」

初稚姫の手を把り、篠竹を押分け山上目蒐けて登り行く。

辛うじて二人は山の頂に到着した。五六歳の童子五人と童女三人、黄金の鍬を持つて何處よりもなく現はれ來り、さしもに堅き岩石を瞬く間に掘つて了つた。

初稚姫「ア、貴女は嚴の身魂、瑞の身魂の大神様、只今言依別命様の御命令に依つて、無事に此處まで玉の御供をして参りました。さア、何うぞ納めて下さい」

五人の童子は、こゝく笑ひながら、ものをも言はず一度に小さき手を差出す。初稚姫は金剛

不壞の如意寶珠の玉函を取り、恭しく頭上に捧げながら五人の手の上に載せた。十本の掌の上に一個の玉函、忽ち五瓣の梅花が開いた。童子は玉函と共に、今揃つたばかりの岩の穴に消えて了つた。

三人の童女は又も手を擴げて、玉能姫の前に進み来る。玉能姫は紫の寶珠の函を取り上げ、恭しく頭上に捧げ、次で三人の童女の手に渡した。童女はものをも言はず微笑を浮べたまゝ、玉函と共に同じ岩穴に消えて了つた。玉能姫は怪しんで穴を覗き見れば、童男、童女の姿は影もなく、只二つの玉函、微妙の音聲を發し、鮮光孔内を照らして居る。

二人は恭しく天津祝詞を奏上し、次で神言を唱へ、天の數歌を歌ひ、岩蓋をなし、其上に今童女が捨て置きし、黄金の鍬を各自に取り上げ、土を厚く衣せ、四邊の小松を其上に植ゑて又もや祝詞を奏上し、悠々として山を下り行く。

玉能姫は、

「お二人さま、えらう御待たせしました。さア、もう御用が濟みました。歸りませう」

佐田彦、波留彦兩人は口を揃へて、

「それは結構で御座いました。御目出度う。これから私等が一度登つて來ますから、暫らく此處に待つて居て下さいませ」

初稚姫「モ一御用が濟みましたので、一歩も上つてはなりません。さア歸りませうよ」

佐田彦「折角此處迄苦勞して御供をして來たのだから、埋めた跡なりと拜まして下さいな」

初稚姫は首を左右に振つてゐる。玉能姫を見れば、是亦無言の儘首を左右に振つてゐる。何處にもなく雷の如き聲、

「一刻も猶豫はならぬ。これより高砂へは寄らず、淡路島を目標に再度山の麓に船をつけ

よ。サブ、早く〜」

と唳鳴るものがある。此言葉に佐田彦、波留彦は、

「ハイ、畏まりました」

と玉能姫、初稚姫を迎へ入れ一生懸命に櫓権を操りつゝ、再度山の方面指して歸り行く。

(大正一一・五・二八 舊五・二 外山豊二録)

瑞 月

天津御神國津御神の御功勳に

萬のものは生き通すなり

物知りは牛の尻かと思ふまで

曇り切つたるあし原の國

第二〇章 三二の魂 (七二二)

時置師神は、神の仕組の時津風、吹き渡る初夏の青葉の薫を身に浴び乍ら窓外を眺め居る。

時しも森の木蔭より玉能姫は初稚姫の手を携へ、二人の荒男と共に欣然として歸り來る。本助

は窓を引き開け拍手して之を迎へて居る。二三日前より此家に訪ね來りし高姫、國依別は、本助

助に教理を闡はし乍ら此處に逗留して居た。

高姫「本助様、貴方は今東の窓から手で拍ちましたが、日天様は西の方へ廻つて居られます

よ」

「いや、今此處へ日天様や、月天様が御いでになりましたから」

「國依別には日天月天の往かぬ事を仰有いますな」

「云ひながら窓を覗き、

「ヤア、お歸りになりました。李助さま、お目出度う、今迄御心配でしたらう」

「ハイ、李助も一寸心配して居りましたよ」

高姫は妙な顔しながら、

「貴方は口では平氣で言つて居らつしやるが、矢張り初稚姫様の事が氣に懸るこ見えますなア」

「別に初稚姫様の事に就ては、神様がついて御座るから心配は致しませぬが、大切な御用を巧く勤めあげたか知らぬと思つて居つたので……然しあの顔色で見れば、巧く御用が出来たらしいですよ」

「大切の御用は……それや又ぎんな事で御座いますか。高姫にも聞かして下さいな」

李助はニコ／＼笑ひながら、

「ハイ言依別命様から大切な秘密の御用を……玉能姫、初稚姫の御兩人が承はりましたのですよ」

「妾の様な口の出神の生宮を差措き、あの様な子供や若彦の女房に大切な御用を仰せ付けるは……言依別も些聞えませぬ。それだから人を使ふ目が無いと言ふのだ。困つたハイカラの教主だなア」

李助は、

「アハ、ハ、」

嬉しさに笑ふ。國依別は門の戸を押し開き、叮嚀に出迎へ、

「皆さま、御苦勞で御座いました。無事に納まりましたかな」

二人は顔に笑を湛へながら一言も發せず、叮嚀に腰を屈め、二人の男と共に欣々這入つて來た。李助は見るより、

『初稚姫様、玉能姫様、谷丸さま、瀧公さま、御苦勞で御座いました』

谷丸「私は言依別命様より佐田彦の宣傳使の名を賜はりました。瀧公さまは波留彦の宣傳使の名を賜はりましたから、何卒今後は、其お心組で呼んで下さい。お節……いや、玉能姫様、初稚姫様のお伴を致しまして神島……ではない、神様の御用に參つて來ました。いやもう大變な結構な事で御座いましたわ』

李助「何は兎もあれ、神様に御禮を申し上げ、お祝の御神酒を頂戴する事に致しませう」

高姫「ア、それは結構で御座いますな。然し如何な御用に御出でになさつたのか、高姫にも様子を聞かして下さいませ。これ玉能姫さま』

玉能姫「此事ばかりは三十五萬年の間、申し上げる事は出來ませぬ。何れ未來でお分りになるでせう』

高姫「なんこ……マア遠い……氣の長い事だなア』

李助「何處の地點に納めた云ふ事は申し上げ難いが、實際は貴方の一旦呑んで居た金剛不壞の如意寶珠と紫の寶玉が三五教の教主の手に返り、其御用を仰せ付かつて或る靈地へ埋藏の御用に行つたのですよ。黄金の玉は言依別の教主自ら何處かの靈地へ埋藏されたさうだ。これで三つの御玉が揃ひまして……高姫さま、お喜びなさいませ』

高姫、怪訝な顔して舌を捲き目を剥き、

『へエ、ケ、ケ、結構ですなア』

云つたとき、嬉しい様な、悲しい様な、不興くさい様な顔して俯向く。國依別、手を拍つて



笑ひ、

「ハ、ハ、ハ、ハ、日の出神の生宮も薩張り往生遊ばしたか、真にお氣の毒の至り。然し乍ら矢張り高姫さまも喜ばねばなりませんまい。もう之で貴方の副守護神の斷念が出来るでせう。是から一意専心、教主の意見に従つて、神界の御用をなさいませ」

高姫「ハイ、如何も神様は皮肉な事をなさいますな。寢ても醒めても玉の行方を探し、神政成就の御用を勤めあげむと、千騎一騎の活動を致して居る此高姫をアフィンに致さして、思ひも寄らぬ人達に、肝腎な一厘の経綸を吩咐けるは………妙な神様も………いや教主もあるものだ。教主のきやうは獸福に王さまたらう、オホ、ハ、ハ、ハ、」

佐田彦「是は聞き捨ならぬ高姫の言葉、その脱線振りは何事で御座るか。今迄の谷丸ならば黙つて居るが、最早教主より命ぜられたる宣傳使だ。宣り直しなさねば承知せぬ」

波留彦「佐田彦宣傳使の言はれた通り、速に宣り直しなさるが宜からうと、波留彦は思ひます」

高姫「高姫鐵道の終點、アフンの驛に着いたのだから、脱線の餘地も無く、のり直し様もなく乗り替へも何の驛もないぢやありませんか。オホ、ハ、ハ、ハ、」

◎

因に言依別命は、一旦高熊山の靈地に神祕の経綸を遂行し、聖地に歸りて神業に參じ、錦の宮の神司玉照彦命、玉照姫命の神示を海外にまで弘布し、八岐大蛇の征伐に従事する數多の神人を教養し、其名を天下に轟かした神代の英雄神である。また奎助は元の時置師神に現はれ、聖地の八尋殿に於て教主を助け、初稚姫と共に忠實に奉仕し、三五教の柱石と呼ばれる事となつた。玉能姫は生田の森に止り、或神命を帯びて稚櫻姫命の神靈を祀り、五六七神

政の魁を勤めた。

若彦は自轉倒島全体を巡歴し、終に神界の命によりて玉能姫と共に神靈に奉仕する事となつた。國依別は兄の眞浦が波斯の國へ出で行きしを以て、已むを得ず宇都山郷の武志の宮に仕へて神教を傳へ、父の松鷹彦に孝養を盡した。

高姫は聖地にあつて錦の宮に仕へつゝ、ありしが、黒姫のあみを追うて海外に渡り、眞正の日の出神に出會し、初めて自己の守護神の素性を悟り、悔い改めて大車輪の活動を續けた。佐田彦、波留彦は言依別命の膝下にあつて、神業を輔佐することゝなつた。

(大要終)

大正壬戌の年

卯月の二十八日に

◎

二十二人の生魂

述べ終りたる今日の日は

日の神、月の大御神

此世の祖神に現れませる

豊國主の大御神

百千萬の神々の

神の使の靈鷹は

峰の尾の上の御仕組

瑞祥祝ふ其爲めに

さしにも廣き殿内を

三つの御玉の隠し所

樂き神世を五六七殿

天照皇大神や

國常立之大御神

大本教を守ります

貴の御前に飛び降る

生田の森や再度山の

鷹鳥姫の改心の

三度舞ひ來る鷹津神

右や左に翔び交ひて

畫龍の額に翼休め

悠々翼を休めたる

瑞の御魂の生れたる

十二の章も面白く

今日は珍らし身を起し

筆者を烟に巻き乍ら

今に寫して眺むるも

榮ゆる御代を松村氏

心眞澄の玉鏡

諸越山も乗り越えて

假設劇場の梁に

今日の生日の足日こそ

生日に因て七百ミ

松雲閣の奥の間に

神の教を敷島の

遠き神代の物語

少しも變らぬ言の葉の

天津御空も海原も

海の内外の隔てなく

豊九二主の分靈

瑞の神徳天地に

空澄み渡り隆々こ

亞細亞、亞弗利加、歐羅巴

島の果まで説き明す

道も貞か二成り行きて

教の花の馥郁こ

神の伊佐男は遠近に

自轉倒島の中心地

神代を祝ふ今日の空

御空を隠す雲の戸を

輝く時も北村の

光り普き神の道

亞米利加藤く高砂の

近藤の靈界物語

山の尾の上や野の末も

薫も床しき佐賀の奥

秀妻の國を初めこし

野山も青く茂りつゝ

神世の秘密洩らさじこ

開いて此處に松の雲

9. 6. 21

神界 經綸

三四六

松雲閣の奥の室で

初夏の風をば浴びながら

二十二卷の物語

目出度くこゝに述べ終る

あゝ、惟神々々

御靈幸はひまませよ

(大正一一・五・二八 舊五・二 北村隆光録)

瑞 月

麻柱の神の心に叶ひなば

さこも高天の原となるなり

如意寶珠【酉の卷】終

大正十一年七月二十五日 印刷  
大正十一年七月三十日 發行  
昭和九年六月廿五日 三版

如意寶珠【酉の卷】奥附

非 賣 品

京都府南桑田郡龜岡町字京町四十二番地

編輯者 櫻 井 重 雄

京都府南桑田郡龜岡町字荒塚内丸一番地

發行兼印刷者 高 木 鐵 男

京都府南桑田郡龜岡町字荒塚内丸一番地

發行兼印刷所 天 聲 社  
【振替大阪七五九一七番】



終

